

岩手県文化財調査報告書第51集

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

—Ⅶ—

(西田遺跡)

昭和55年3月

岩手県教育委員会
日本国有鉄道盛岡工事局

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

—Ⅶ—
(西田遺跡)

序

文化財は私たちの祖先が長い歴史の間につくり出し伝えてきた貴重な財産であります。この文化遺産を保護保存し次の世代に引継いでいくと共に、私たち自身もこの文化財に学び新たな文化創造への基礎とすることが、重要なことと考えます。

この報告書は東北新幹線建設工事に関連し、昭和50、51、52年の3ヶ年間にわたり発掘調査した紫波町西田遺跡のまとめであります。調査結果によればこの遺跡は、縄文時代早期、前期末、中期、更に平安時代に関係する内容となっておりますが、特に縄文時代中期における墓壙群を中心に柱穴状ピット群、竪穴住居跡、貯蔵穴土壙群が環状に配置された規則性のある集落形態を示し、当時の社会構造を知るうえで貴重な資料を提供できたものと自負しております。

昭和47年度から開始した一関、盛岡間 101 kmに及ぶ新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委託事業は本報告書をもって終了することとなりました。これまでの調査の成果が学術研究に役立つと共に広く社会教育面でも活用されれば幸いです。

最後にこれまでの調査について長い期間御援助、御協力をいただいた関係各位に対し感謝するとともに、文化財の保護保存の万全を期するために今後共一層の御指導、御協力をお願いする次第です。

昭和55年3月

岩手県教育委員会

教育長 新 里 盈



例 言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書第7分冊の最終の第7分冊として、昭和50年度と51年度それに昭和52年度の3ケ年に亘って発掘調査を実施した紫波郡紫波町に所在する西田遺跡について作成したものである。

2. 本遺跡の発掘調査、および調査資料において次の方々からご指導、ご助言を賜わった。(敬称略)

- ・岩手大学名誉教授 板橋 源
- ・岩手大学教授 草間 俊一
- ・北海道大学助教授 林 謙作
- ・國學院大學教授 小林 達雄
- ・岩手県文化財審議会委員 司東 真雄

3. 本書における資料の鑑定、分析などについては、次の方々からご教示、ご協力を賜わった。(敬称略)

- ・石材鑑定
岩手県立杜陵高等学校教諭 佐藤二郎
- ・ピット内および土器内の土壌リン分析
岩手大学農学部教授 吉田 稔

4. 本書に掲載した地形図、空中写真は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図、20万分の1地勢図、および2万分の1空中写真を使用したものである。

5. グリッド配置図は、日本国有鉄道作成による500分の1地形図を使用した。

6. 土質柱状図は、日本国有鉄道所有のボーリング資料を参考にした。

7. 遺跡における層相と遺物の色調観察は、小山、竹原編著『新版、標準土色帖』日本色研事業㈱を使用した。

8. 本遺跡の基準方向角は次のとおりである。

- ・南部地区(水田部分も含む) N-12°36'32"-E
- ・北部地区 N-5°56'24"-W

方向は平面直角座標第X系(東北)による座標北を示す。

原点 (経度 140°50'00"000)
(緯度 40°00'00"000)

9. 遺物、写真、実測図等の資料は、岩手県教育委員会事務局文化課において保管している。

10. 調査主体者

岩手県教育委員会 日本国有鉄道盛岡工事局

11. 調査担当者

岩手県教育委員会事務局文化課

12. 本書の執筆は次のとおりである。

- ・序文 調査の経過……嶋 千秋
調査の方法他……朴沢正耕
- ・本文 I 遺跡の立地と環境……朴沢正耕
II 調査の概要…………… “
III 報告に際して……………佐々木勝、鈴木優子
IV 検出遺構と出土遺物
南部地区
〔I〕縄文時代の遺構と遺物……菅原弘太郎、鈴木隆英
〔II〕平安時代の遺構と遺物……細谷英男
北部地区
〔I〕縄文時代の遺構……佐々木勝
〔II〕出土遺物……鈴木優子
〔III〕平安時代以降の遺構と遺物……細谷英男
取付道路（町道西田線）地区……菅原弘太郎
V 遺構と出土遺物に関する問題点（北部地区）
〔1〕～〔5〕 佐々木勝
〔6〕 鈴木優子

なお遺物・図面の整理、実測、および写真の撮影などは期限付臨時職員がこれを補助した。

目 次

序 文

1 調査の経過	1
2 調査の方法	4
3 整理の方法	5
4 遺物保存処理の方法	6
5 広報活動の実施	6

本 文

I 遺跡の位置と環境	11
1 地形と地質	11
2 周辺の遺跡	15
II 調査の概要	18
1 調査の経過	18
2 調査の方法	20
3 調査の結果	20
III 報告に際して	24
IV 検出遺構と出土遺物	26

南部地区

(1) 縄文時代の遺構など	26
1 住居跡および遺物集中包含区域	26
(1) 遺構	26
R F 62住居跡	26
T J 62住居跡	30
遺物集中包含区域	35
(2) まとめ	40
a 住居跡の特徴	40
b 住居跡および遺物集中包含区域の出土遺物の特徴	40
c 住居跡および遺物集中包含区域の所属時期	41
d 住居跡および遺物集中包含区域の性格	42
2 小竪穴状遺構	43
3 溝状土壌	44
(2) 平安時代の遺構と遺物	48
1 竪穴住居跡	48
Y D 56住居跡	48
T H 68住居跡	50
2 遺構と遺物に関する問題点	55
遺構	55

出土遺物	56
------	----

北部地区

(I) 縄文時代の遺構	57
1 竪穴住居跡	57
E E 12住居跡	57
E E 21住居跡	58
E F 03住居跡	60
E G 21住居跡	61
E H 21住居跡	62
E H 15住居跡	63
E I 15住居跡	65
E I 21 - 1住居跡	65
E I 21 - 2住居跡	67
E J 21住居跡	67
F J 18住居跡	68
F B 53 - 1住居跡	69
F B 53 - 2住居跡	69
F C 12住居跡	71
F C 21住居跡	72
F D 62住居跡	73
F E 18住居跡	74
F E 21住居跡	76
F G 21住居跡	76
G A 21住居跡	78
G F 21 - 1住居跡	79
G F 21 - 2住居跡	81
G H 18住居跡	81
G I 18住居跡	82
H F 56住居跡	82
H G 50住居跡	84
H I 15住居跡	85
H F 06住居跡	87
H H 06住居跡	87
H G 06住居跡	88
H G 09住居跡	88
H E 15住居跡	91
H F 18住居跡	91
H H 21 - 1住居跡	92
H H 21 - 2住居跡	92
G G 03竪穴状遺構	95

2	墓塚 一舟底状土塚群	96
3	柱穴状ピット群(長方形柱穴列群)	128
4	小竪穴状遺構	222
	(1) 貯蔵穴状ピット	222
	(2) その他のピット類	288
5	溝状土塚	291
〔Ⅱ〕	出土遺物	295
1	土器	295
2	土偶	337
3	土製品	337
4	石器	340
5	石製品	350
〔Ⅲ〕	平安時代の遺構と遺物	415
1	竪穴住居跡	415
	F G 21住居跡	415
	F I 21住居跡	415
2	甕棺墓	419
3	F B 56土塚	421
4	E J 21土塁・F B 21大溝	422
5	まとめ	423

取付道路(町道西田線)地区

1	小竪穴状遺構	427
2	溝状土塚	428
V	遺構とその出土遺物に関する問題点(北部地区)	431
〔1〕	住居跡の構造	432
	平面形	432
	規模	432
	方向	433
	周溝	434
	床面	434
	柱穴	434
	炉	435
〔2〕	貯蔵穴状ピット	439
	形態分類	439
	遺物の出土状況	443
〔3〕	墓塚群	443
1	墓塚の分布形態	443
2	墓塚の形状	449
3	頭位方向	450
4	環状帯の土塚墓と内帯の土塚墓との関係	451

5	土墳墓の所属時期	451
(4)	柱穴状ピット群	453
1	長方形柱穴列の分布形態	453
2	長方形柱穴列の形態分類	455
3	長方形柱穴列の機能・性格	457
4	長方形柱穴列の類列	459
5	長方形柱穴列の所属時期	462
(5)	遺跡の構造とその特質	465
(6)	出土遺物	470
1	土器	470
2	石器	475
3	土偶・土製品・石製品	478
4	まとめ	479
	[付記]	480
	[参考文献]	480
	写真図版	481～532
	発掘調査担当者および協力機関	533
	発掘調査地元作業員名簿	533・534
	整理作業員名簿	535
	岩手県教育委員会事務局文化課職員一覧	536

目 次

第 I 図	東北新幹線関係遺跡図	9	第36図	H G 50住居跡	84
第1図	紫波南部地区の地形分類概念図	12	第37図	H H 15住居跡	86
第2図	地質概念図	14	第38図	H F 06・H H 06・H G 06・09住居跡	89
第3図	遺跡の位置と周辺の遺跡	16	第39図	H E 15・H F 18・H H 21—1・H H 21—2住居跡	93
第4図	グリッド配置図	21	第40図	G G 03竪穴状遺構	95
第5図	縄文時代の住居跡(早期)・小竪穴 (その他ピット)溝状各遺構配置図	27	第41図	墓壇断面図1)	116
第6図	R F 62住居跡断面実測図	29	第42図	墓壇断面図2)	117
第7図	R F 62住居跡およびT J 62住居跡出 土遺物実測・拓影図1)	31	第43図	墓壇断面図3)	118
第8図	T J 62住居跡断面実測図	32	第44図	墓壇断面図4)	119
第9図	T J 62住居跡出土遺物実測・拓影図 (2)および縄文時代遺物包含層その他 の出土遺物実測図1)	34	第45図	墓壇断面図5)	120
第10図	南部地区縄文時代遺物包含層その他 の出土石器類実測図1)	36	第46図	墓壇断面図6)	121
第11図	南部地区縄文時代遺物包含層その他 の出土石器類実測図2)	37	第47図	長方形柱穴列配置図(A群)	129
第12図	南部地区縄文時代遺物包含層その他 の出土石器類実測図3)	38	第48図	長方形柱穴列配置図(B群)	131
第13図	小竪穴(その他ピット)・溝状各遺構 断面図	45	第49図	長方形柱穴列配置図(C群)	135
第14図	Y D 56住居跡断面図	49	第50図	長方形柱穴列配置図(D群)	137
第15図	Y D 56住居跡出土土器実測図	50	第51図	長方形柱穴列配置図(E群)	140
第16図	T H 68住居跡断面図	51	第52図	長方形柱穴列配置図(F群)	142
第17図	T H 68住居跡出土土器実測図1)	54	第53図	長方形柱穴列配置図(G群)	145
第18図	T H 68住居跡出土土器実測図2)	55	第54図	長方形柱穴列配置図(H群)	148
第19図	E E 12住居跡	57	第55図	長方形柱穴列配置図(I群)	150
第20図	E E 21住居跡	59	第56図	長方形柱穴列配置図(J群)	153
第21図	E F 03住居跡	60	第57図	柱穴状ピット断面図(1)	158
第22図	E G 21・E H 21住居跡	61	第58図	柱穴状ピット断面図(2)	159
第23図	H 15・E I 15住居跡	64	第59図	柱穴状ピット断面図(3)	160
第24図	E I 21—1・E I 21—2・E J 21住居跡	66	第60図	柱穴状ピット断面図(4)	161
第25図	E J 18住居跡	68	第61図	柱穴状ピット断面図(5)	162
第26図	F B 53—1・F B 53—2住居跡	70	第62図	柱穴状ピット断面図(6)	163
第27図	F C 12住居跡	71	第63図	柱穴状ピット断面図(7)	164
第28図	F C 21住居跡	72	第64図	柱穴状ピット断面図(8)	165
第29図	F D 62住居跡	73	第65図	柱穴状ピット断面図(9)	166
第30図	F E 18・F E 21住居跡	75	第66図	柱穴状ピット断面図(10)	167
第31図	F G 21住居跡	77	第67図	柱穴状ピット断面図(11)	168
第32図	G A 21住居跡	78	第68図	柱穴状ピット断面図(12)	169
第33図	G F 21—1・G F 21—2住居跡	80	第69図	柱穴状ピット断面図(13)	170
第34図	G H 18・G I 18住居跡	81	第70図	柱穴状ピット断面図(14)	171
第35図	H F 56住居跡	83	第71図	柱穴状ピット断面図(15)	172
			第72図	柱穴状ピット断面図(16)	173
			第73図	柱穴状ピット断面図(17)	174
			第74図	柱穴状ピット断面図(18)	175
			第75図	柱穴状ピット断面図(19)	176
			第76図	柱穴状ピット断面図(20)	177
			第77図	柱穴状ピット断面図(21)	178
			第78図	柱穴状ピット断面図(22)	179
			第79図	柱穴状ピット断面図(23)	180

第 80 図	柱穴状ビット断面図 (24)	181	第 127 図	出土土器拓影図 (11)	314
第 81 図	柱穴状ビット断面図 (25)	182	第 128 図	出土土器拓影図 (12)	315
第 82 図	柱穴状ビット断面図 (26)	183	第 129 図	出土土器拓影図 (13)	316
第 83 図	柱穴状ビット断面図 (27)	184	第 130 図	出土土器拓影図 (14)	317
第 84 図	柱穴状ビット断面図 (28)	185	第 131 図	出土土器拓影図 (15)	318
第 85 図	柱穴状ビット断面図 (29)	186	第 132 図	出土土器拓影図 (16)	319
第 86 図	柱穴状ビット断面図 (30)	187	第 133 図	土器実測図 (1)	320
第 87 図	柱穴状ビット断面図 (31)	188	第 134 図	土器実測図 (2)	321
第 88 図	柱穴状ビット断面図 (32)	189	第 135 図	土器実測図 (3)	322
第 89 図	柱穴状ビット断面図 (33)	190	第 136 図	土器実測図 (4)	323
第 90 図	柱穴状ビット断面図 (34)	191	第 137 図	土器実測図 (5)	324
第 91 図	柱穴状ビット断面図 (35)	192	第 138 図	土器実測図 (6)	325
第 92 図	柱穴状ビット断面図 (36)	208	第 139 図	土器実測図 (7)	326
第 93 図	柱穴状ビット断面図 (37)	209	第 140 図	土器実測図 (8)	327
第 94 図	柱穴状ビット断面図 (38)	210	第 141 図	土器実測図 (9)	328
第 95 図	柱穴状ビット断面図 (39)	211	第 142 図	土器実測図 (10)	329
第 96 図	柱穴状ビット断面図 (40)	212	第 143 図	土器実測図 (11)	330
第 97 図	柱穴状ビット断面図 (41)	213	第 144 図	土器実測図 (12)	331
第 98 図	柱穴状ビット断面図 (42)	214	第 145 図	土器実測図 (13)	332
第 99 図	柱穴状ビット断面図 (43)	215	第 146 図	土器実測図 (14)	333
第 100 図	柱穴状ビット断面図 (44)	216	第 147 図	土器実測図 (15)	334
第 101 図	柱穴状ビット断面図 (45)	217	第 148 図	土器実測図 (16)	335
第 102 図	貯蔵穴状ビット断面図 (1)	252	第 149 図	土器実測図 (17)	336
第 103 図	貯蔵穴状ビット断面図 (2)	253	第 150 図	土偶実測図	338
第 104 図	貯蔵穴状ビット断面図 (3)	254	第 151 図	土製品実測図	339
第 105 図	貯蔵穴状ビット断面図 (4)	255	第 152 図	石器実測図 (1)	352
第 106 図	貯蔵穴状ビット断面図 (5)	256	第 153 図	石器実測図 (2)	353
第 107 図	貯蔵穴状ビット断面図 (6)	257	第 154 図	石器実測図 (3)	354
第 108 図	貯蔵穴状ビット断面図 (7)	258	第 155 図	石器実測図 (4)	355
第 109 図	貯蔵穴状ビット断面図 (8)	259	第 156 図	石器実測図 (5)	356
第 110 図	貯蔵穴状ビット断面図 (9)	260	第 157 図	石器実測図 (6)	357
第 111 図	貯蔵穴状ビット断面図 (10)	261	第 158 図	石器実測図 (7)	358
第 112 図	貯蔵穴状ビット断面図 (11)	262	第 159 図	石器実測図 (8)	359
第 113 図	貯蔵穴状ビット断面図 (12)	263	第 160 図	石器実測図 (9)	360
第 114 図	その他ビット類断面図	290	第 161 図	石器実測図 (10)	361
第 115 図	溝状土塊断面図	294	第 162 図	石器実測図 (11)	362
第 116 図	土器器形模式図	296	第 163 図	石器実測図 (12)	363
第 117 図	出土土器拓影図 (1)	304	第 164 図	石器実測図 (13)	364
第 118 図	出土土器拓影図 (2)	305	第 165 図	石器実測図 (14)	365
第 119 図	出土土器拓影図 (3)	306	第 166 図	石器実測図 (15)	366
第 120 図	出土土器拓影図 (4)	307	第 167 図	石器実測図 (16)	367
第 121 図	出土土器拓影図 (5)	308	第 168 図	石器実測図 (17)	368
第 122 図	出土土器拓影図 (6)	309	第 169 図	石器実測図 (18)	369
第 123 図	出土土器拓影図 (7)	310	第 170 図	石器実測図 (19)	370
第 124 図	出土土器拓影図 (8)	311	第 171 図	石器実測図 (20)	371
第 125 図	出土土器拓影図 (9)	312	第 172 図	石器実測図 (21)	372
第 126 図	出土土器拓影図 (10)	313	第 173 図	石器実測図 (22)	373

第174図	石器実測図(23)	374
第175図	石器実測図(24)	375
第176図	石器実測図(25)	376
第177図	石器実測図(26)	377
第178図	石器実測図(27)	378
第179図	石器実測図(28)	379
第180図	石器実測図(29)	380
第181図	石器実測図(30)	381
第182図	石器実測図(31)	382
第183図	石器実測図(32)	383
第184図	石器実測図(33)	384
第185図	石器実測図(34)	385
第186図	石製品実測図	386
第187図	石製品実測図	387
第188図	F G 21住居跡平面断面図	416
第189図	F I 21住居跡平面断面図	417
第190図	F I 21住居跡出土土器実測図	418

第191図	G J 68甕棺墓	419
第192図	甕実測図	420
第193図	F B 56土壌断面断面図	421
第194図	F B 56土壌出土土器実測図	422
第195図	西田北部地区地形図	423
第196図	E J 21土塁・F B 21大溝平面断面図	425
第197図	竪穴遺構(その他ビット類)・溝 状遺構平面断面図	430
第198図	柱穴配置模式図	435
第199図	貯蔵穴状ビット分類図	442
第200図	墓墳群及び長方形柱穴列群対照図	445
第201図	池辺第14遺跡遺構分布概念図	460
第202図	万座遺跡第2試掘溝平面図	461
第203図	阿久遺跡全体図	463
第204図	第II群土器器形変遷概念図	471
第205図	土器一括土器出土例模式図	473
第206図	石器類別出土頻度グラフ	475

写真図版目次

図版1	遺跡付近空中写真	481
図版2	西田遺跡全景	482
図版3	西田遺跡地区別近景	483
図版4	縄文早期遺構と遺物	484
図版5	縄文早期遺物	485
図版6	南部地区ビット類	486
図版7	南部地区平安時代住居跡(Y D 56・ T H 68住)	487
図版8	T H 68住居跡出土土器	488
図版9	北部地区縄文中期集落跡	489
図版10	作業風景	490
図版11	E E 21・E G 21・E H 15・E H 21住 居跡	491
図版12	E I 21-1・E I 21-2・E J 21住 居跡	492
図版13	F D 62・F B 53-1・F D 53-2住 居跡	493
図版14	F E 18・G A 21住居跡	494
図版15	G F 21・G I 18・H F 18・H E 15・ H G 50住居跡	495
図版16	H I 15住居跡	496
図版17	墓墳群および柱穴状ビット群(空中 写真)	497
図版18	墓墳群およびG C 095・G D 091・ G F 562・G E 501・G E 502・G E 505墓墳	498
図版19	柱穴状ビット	499
図版20	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ	

ト群(空中写真)	500	
図版21	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト	501
図版22	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト遺物出土状況	502
図版23	フラスコ形ビットその他ビット類	503
図版24	E H 21・E I 21-1・E H 15・E J 15・E J 21住居跡出土土器	504
図版25	E J 21・F C 21・F J 18・H I 15・ F E 18・C I 15・H H 06住居跡出土 土器	505
図版26	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト出土土器(1)	506
図版27	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト出土土器(2)	507
図版28	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト出土土器(3)	508
図版29	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト出土土器(4)	509
図版30	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト出土土器(5)	510
図版31	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト出土土器(6)	511
図版32	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト出土土器(7)	512
図版33	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ ト出土土器(8)	513
図版34	フラスコ形ビット・ビーカー形ビッ	

	ト出土土器(9).....	514	図版44	石器第16・17類.....	524
図版35	フラスコ形ビット・ピーカー形ビッ ト出土土器(10).....	515	図版45	石器第16・17類.....	525
図版36	柱穴状ビット・遺構外出土土器.....	516	図版46	石器第18・19類・石製品.....	526
図版37	石器第1～3類.....	517	図版47	石製品・土偶・土製品.....	527
図版38	石器第4類.....	518	図版48	F I 21住居跡・F B56土壇・E J 21 土塁・F B21大溝.....	528
図版39	石器第5類.....	519	図版49	F I 住居跡・F B56土壇出土土器.....	529
図版40	石器第5～7類.....	520	図版50	G J 68カメ棺墓.....	530
図版41	石器第8・10類.....	521	図版51	取付道路(町道西田線)地区ビット 類.....	531
図版42	石器第10・13類.....	522	図版52	埋蔵文化財展・西田日報・発掘調査記念.....	532
図版43	石器第11・14・15類.....	523			

表 目 次

第1表	東北新幹線関係遺跡一覧.....	7	第9表	貯蔵穴状ビット埋土観察表.....	264
第1表	周辺の遺跡地名表.....	17	第10表	土器観察表.....	388
第2表	南部地区出土縄文時代石器類一覧表.....	39	第11表	土器観察表.....	396
第3表	墓壇観察一覧表.....	110	第12表	土偶観察表.....	401
第4表	墓壇埋土観察表.....	122	第13表	土製品観察表.....	401
第5表	掘立柱状柱穴列一覧表.....	155	第14表	石器観察表.....	402
第6表	環状柱穴列の柱穴規模・重複関係一 覧表.....	193	第15表	石製品観察表.....	414
第7表	住居域の柱穴規模・重複関係一覧表.....	217	第16表	住居跡一覧表.....	437
第8表	貯蔵穴状ビット観察一覧表.....	248	第17表	遺跡の構造.....	467

付 図

付図1	地形図	付図5	長方形柱穴列(柱穴状ビット)配置 図
付図2	北部地区遺構全体配置図	付図6	住居域の柱穴状ビット配置図
付図3	墓壇(舟底状土壇群)配置図		
付図4	貯蔵穴状ビット配置図		

序 文

1. 調査の経過

昭和46年から実施された岩手県内東北新幹線建設工事に関係する埋蔵文化財発掘調査は一関市より盛岡市に至る約101kmの間がその対象であり、発掘調査実施前の協議・分布調査の段階から発掘調査実施、調査結果の報告書刊行まで約9年の歳月を要した。ここでは、1. 発掘調査実施前の経過、2. 年度別発掘調査の経過、3. 整理報告書作成の経過に大別し、その概要についてまとめてみたい。

(1) 発掘調査実施前の経過

全国新幹線鉄道整備法（昭和45年5月18日法律第71号）に基づく東北新幹線建設予定地内における県内埋蔵文化財の取扱いについての最初の協議は昭和46年5月17日に日本国有鉄道盛岡工務局と岩手県教育委員会との間で行われ、運輸大臣に提出する申請書に添付する文化財資料は遺跡台帳により作成することとし、今後県教育委員会は分布調査実施のための準備と、建設工事に関連する範囲内での遺跡についての情報を提出することにした。昭和46年11月2日、新幹線建設予定地内の分布調査実施のための協議をもち調査員は県教育委員会が関係市町村教育委員会の協力のもとに、県文化財専門委員、考古学専攻者、発掘調査経験者の中から委嘱をし市町村単位ごとに班の構成をした。遺跡分布調査は宮城県境より盛岡市に至る約101kmを巾2kmの範囲で実施することとし、11月20日より約2ヶ月の期間で終了した。その結果93遺跡が確認された。

昭和47年4月に主管課である社会教育課に4名の埋蔵文化財担当職員を文化財主査として配置し、さらに4名の嘱託補助員を採用した。東北新幹線担当職員として嶋千秋文化財主査が当り他は東北縦貫自動車道関係の業務を担当しそれぞれの業務の遂行に当たった。更に同年6月1日より10日までの間、新幹線ルート用地杭の設置時期に合わせてセンター杭を中心に巾20m巾に含む遺跡範囲確認のための現地調査を嶋千秋・菊地郁雄両文化財主査によって行い、その結果43遺跡を発掘調査対象遺跡として決定した。その後、新幹線関連事業として東北本線北上貨物操作場の建設予定地と用地問題で現地踏査ができずにいた花巻地区の分布調査の追加により最終的に48遺跡が発掘調査対象の遺跡となった。その結果に基づき調査行程、方法等について協議を進め、全遺跡が記録保存を前提としての発掘調査を実施することにした。

(2) 発掘調査の経過

当初、東北新幹線開業は昭和51年度であり49年度中に発掘調査を終了しなければ支障があるということが調査計画立案にあたっての最大の悩みでもあった。そのため野外の発掘調査を優先先

行させ、調査結果の整理、報告書の作成、刊行は別途に考えることにした。そのことから冬期間に入っても発掘調査を継続せざるを得ないこともあり、調査の精度や報告書作成の面からも反省すべき点が多々あった。調査開始後の経過の中で国内経済に大きな影響を与えた総需要抑制政策等が原因となって、東北新幹線開業時期が延期となり発掘調査期間は昭和47年10月から52年10月までとなった。調査結果の整理と報告書作成作業は53・54年度の2ケ年で実施することとした。なお、埋蔵文化財発掘調査委託の契約は年度ごとに日本国有鉄道盛岡工事局長と岩手県知事との間で締結された。調査主体者は岩手県教育委員会教育長、調査主管課は岩手県教育委員会事務局文化課である。

次に年度ごとの主な発掘調査経過について略記する。

昭和47年度 調査員3名、補助員1名、調査期間10月25日～12月18日。3遺跡。

矢巾町所在の下赤林Ⅰ遺跡、下赤林Ⅲ遺跡、高畑遺跡を調査した。この調査は用地未買収時期の調査であり、国鉄が地権者より発掘承諾を得ての調査であった。

昭和48年度 調査員8名、補助員5名、調査期間5月1日～1月29日 8遺跡。

4月、文化課の新設と共に埋蔵文化財調査班が誕生し、本格的な発掘調査が開始された。しかし、用地買収の関係などから年間スケジュールが確定しないまま、まず北上貨物操作場関連遺跡の南館遺跡よりスタートした。ここでは発掘調査方法の統一化を計るため新幹線班全員による合同研修調査を実施した。そして7月より1遺跡2名の調査員と1名の補助員を最低の班構成員とし、遺跡規模によって構成員を調整することとして8遺跡の調査を実施した。夏休み期間には発掘調査の経験のある教員・岩手大学生・京都女子大生の協力参加を得た。12月に入って杉の上Ⅱ遺跡において平安時代の焼土堅穴住居跡から多量の炭化材の発見があり、炭化材の処理上やむを得ずビニールハウスの設置の中で1月下旬まで冬期間の調査となった。

昭和49年度 調査員8名、補助員5名、調査期間4月8日～12月20日 17遺跡。

江刺市と稗貫郡石鳥谷町所在の遺跡が主な調査地域となった。江刺市落合Ⅱ遺跡は分布調査による遺跡範囲は北上川流域に広がる河岸低地における水田面より約1m高い微高地一帯としていたが、水田面における新幹線高架橋建設工事に多量の遺物が発見され、地元教育委員会からの連絡があり、そのため遺跡範囲を広げ調査した結果、水田面下旧河道の泥炭層から平安時代の豊富な遺物資料の発見となり貴重な遺跡となった。江刺地区の調査は北上川東岸一帯であり各遺跡は蛇行しながら南下する北上川とその支流である広瀬川、人首川、伊手川の氾濫により度々冠水をうけていることから遺構の検出、精査の際に土層判別と遺構範囲の確認に手間とり多くの時間を費やした。

昭和50年度 調査員8名、補助員7名、調査期間4月10日～2月21日 15遺跡

調査地区が、一関市、江刺市、北上市、花巻市、紫波郡紫波町、都南村それに盛岡市と広範囲

におよび調査班相互の連絡・調整が困難な年であった。7月に北上市鬼柳町町分の新幹線建設予定地内にあったイチョウの大木の根元から一字一石経を地元民である佐藤忠二、佐藤丑蔵氏が発見されたことから鬼柳西裏遺跡としての取り扱いをすることとした。調査の結果、縄文時代・平安時代・近世の各時期にわたる複合遺跡となり2年継続の調査となった。また江刺市宮地遺跡は奈良時代から平安時代にかけての大集落となり調査中に2基の井戸が発見され、そのため乾水期である冬期間の調査となった。厳寒の中で2月末までの調査となり、遺構実測図の完成と井戸枠のとり上げを行った。紫波町西田遺跡は北上山地における小丘陵の西端にあり蛇行する北上川によって切離された台地に立地し滝名川と北上川低地に囲まれた残丘上にある。標高100m前後で周辺の水田面との比高は約10mである。この丘陵のほぼ中央を南北に縦断する新幹線予定地を調査対象としたが、ほとんどが山林であり遺跡としての確証はなかなかつかめなかった。立地形に調査根拠をもったこともあって、まず本年度は遺構検出のための調査を目的としたグリット方式と重機使用（バックホー）による表土はぎを行った。その結果、縄文時代早期・中期・平安時代にわたる大遺跡であることが確認された。なお年度末人事異動で昭和48年度より調査を担当した蜂谷伸平氏が陸前高田市立高田小学校へ転勤された。

昭和51年度 調査員7名、補助員8名、調査期間4月9日～12月23日 9遺跡。

昨年度よりの調査継続である江刺市宮地遺跡、北上市鬼柳西裏遺跡、紫波町西田遺跡と盛岡市所在の4遺跡が調査の中心であり本年度で48全遺跡について調査が及んだことになった。西田遺跡は北部地区に縄文時代中期の墓塚群を中心とする集落の全貌が現われ次年度の調査によって結着をつけざるを得ないことになった。48年度から新幹線班で調査担当した穴倉圭介氏が県立遠野農業高校へ、菊池久氏は釜石市立大松小学校へそれぞれ年度末人事異動で転勤された。

昭和52年度 調査員6名、補助員7名、調査期間4月11日～12月15日 1遺跡。

紫波町西田遺跡のみの調査となった。縄文時代中期における墓塚群、円筒形ピット群、貯蔵穴群、住居跡群によって構成された大遺跡の調査をもって新幹線関連48全遺跡の発掘調査を終了した。調査結果の整理はそれぞれの年度における発掘調査終了後、分室において図面、写真、遺物等の整理を一部実施した。

(3) 整理・報告書作成の経過

昭和53年度 調査員6名、期限付臨時職員12名。

53・54年度の2年間にわたる本格的な整理作業に入った。53年度は48遺跡のうち40遺跡の報告書作成のための作業を実施し、1分冊は一関・江刺地区（10遺跡）、2分冊は北上・花巻・石鳥谷地区（11遺跡）、3分冊には紫波・矢巾・都南・盛岡地区（19遺跡）を収録した。

昭和54年度 調査員6名、期限付臨時職員12名。

本年度は整理作業の最終年度に当たり、新幹線関連遺跡48遺跡の残り8遺跡の報告書作成のた

めの作業を実施した。本年度は報告書4分冊とし、前年度3分冊に続き第4分冊として江刺市の宮地遺跡、5分冊として江刺市の鴻ノ巣館遺跡、石鳥谷町の高畑遺跡、矢巾町の白沢遺跡の3遺跡、6分冊には江刺市の落合Ⅱ遺跡、北上市の南館遺跡と鬼柳西裏遺跡の3遺跡、第7分冊には紫波町の西田遺跡をそれぞれ収録した。

なお、昭和55年2月7日から13日までの1週間にわたって、岩手県民会館第1展示室を会場に『埋もれていた祖先の生活』のテーマのもとに新幹線関連遺跡の埋蔵文化財展を開催し、県民にその調査資料を公開した。

2 調査の方法

遺跡の調査は原則として以下のような方法を用いた。

(1) 調査対象範囲の選定

新幹線建設地内、及び付帯施設建設地内にかかる遺跡は、全て調査対象とした。

(2) 調査区の設定

調査対象範囲全域にグリッドを設定し、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握につとめた。グリッドは調査地の地形を考慮し、東北新幹線の任意の中心杭の2点（東京起点の距離程が明示してあるもの）を原点とし、両者を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準線とし3m単位の割合、30mで1地区とした。グリッド名は東西方向を数字、南北方向をアルファベットで表わし、両者の組合せて呼称した。なお、地区名は調査区の北から順に設定した。

(3) 発掘の方法

① 探索発掘と全面発掘

調査対象範囲内における遺構の分布状況を調べるため、原則として3m×3mのグリッドを市松状に粗掘し、検出作業を進めた。また、基本的な層位の把握のための深掘りを設定した。遺構や遺物を含む層が検出された場合は、その具体的内容と分布関係などを究明するため、必要な範囲にわたって全面発掘を行った。

② 遺構調査の方法

検出された遺構については、該当のグリッド名を付した。その場合、最も北西に位置するグリッドで呼称した。遺構の精査にあたっては、記述項目を統一したカードなどを使用した。

③ 遺物の取り上げ

a 遺物は原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡記号、出土年月日、出土地点、出土層位を記録の上、取り上げた。

b 出土遺物のうち、その遺構に直接関係するものや、年代決定資料となり得るものについて

ては、出土レベルと位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

④ 実測図の作成

断面図—断面図は基本層位、遺構の堆積状態や遺構細部の在り方を示す遺構断面を作成した。原則として、原図の縮尺は $\frac{1}{20}$ であるが、カマド、炉、埋設土器などの細部については、必要に応じて $\frac{1}{10}$ などの縮尺を用いた。各層における土色、土性、混入物、堅さ、遺物のあり方などの注記は統一を心がけたが一部統一を欠いたものもある。

平面図—平面図は調査区全域を表現したものの、遺構や遺物包含層での遺物の出土状況を記録するための部分的なものがある。原図の縮尺は $\frac{1}{20}$ を原則としたが、必要に応じて $\frac{1}{10}$ などの縮尺を用いた。測量方法は、遺り方測量により作図した。

⑤ 写真の記録

記録として撮影した写真には、35mm版モノクロ写真、35mm版カラー写真、35mm版エクタクローム写真（スライド用）、6×7cmモノクロ写真、35mm版赤外線写真などがある。

⑥ その他の記録

調査記録として、調査日誌を各遺跡ごとに備え、記録した。また、調査終了後の整理時においても、業務日誌、作業記録、遺構カードを備え、記録した。

3 整理の方法

発掘調査の期間内で現場作業と併行して行った整理作業は遺物の洗浄だけで、大部分は分室で進められた。整理にあたっては図面・遺物・写真とそれぞれ整理基準を作成して実施した。

(1) 図面整理の方法

発掘調査時に作成した図面は次のような要領で整理した。第一原図は点検、修正の上、登録番号を符し、それをもとに第二原図を作成し、それぞれを図面台帳に記載した。

(2) 遺物整理の方法

遺物は洗浄し、遺跡記号、採取年月日、遺構名、地区名、層位、遺物番号を符し、接合、復元作業を進めた。その後分類作業を進める中で、資料化できる遺物について、実測図、拓本の作成をし、写真撮影をした。

(3) 写真整理の方法

写真は遺跡ごとにそれぞれのネガと密着焼付のものをアルバムに貼付し、遺構名、地区名、遺物番号、関係実測図番号、撮影方向などを記入し、整理した。

4 遺物保存処理の方法

出土遺物のうち、木製品（井戸杵、木筒、木器類）、鉄製品（鋤先、紡錘車など）については、財団法人元興寺文化財研究所に委託し、可能な範囲で保存処理をおこなった。

5 広報活動の実施

調査内容を広く知らせ、文化財についての関心を深めてもらうことも意図し、次のような活動をした。

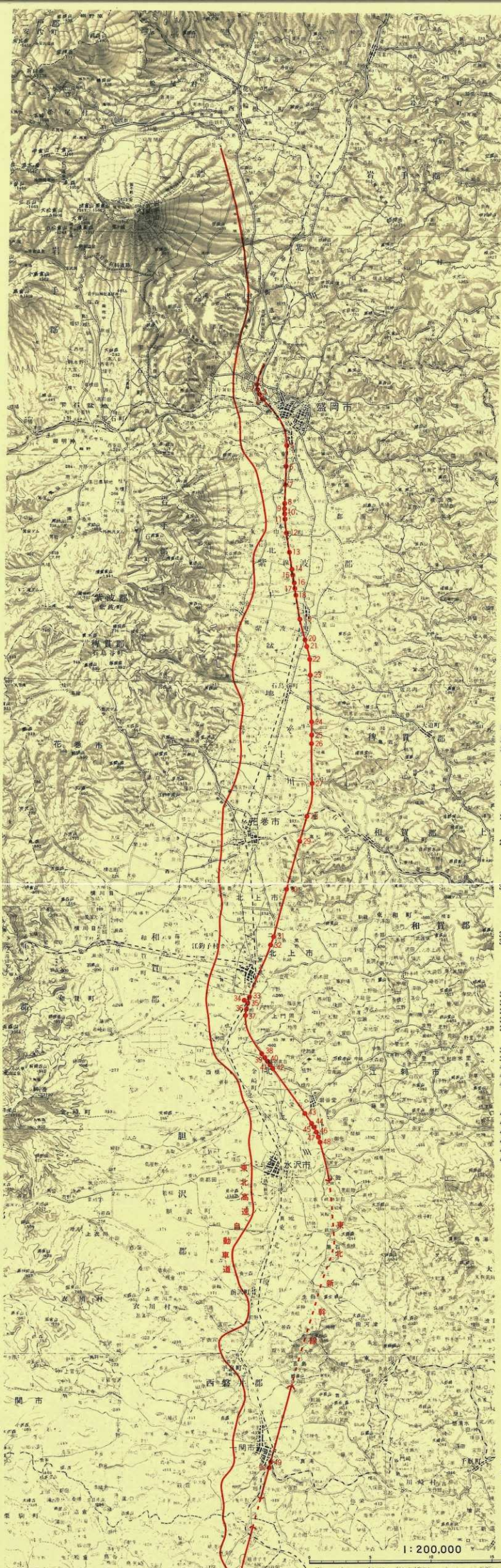
- ・現地説明会の開催
- ・現場だよりの発行
- ・関係機関への資料提供

(第I表) 東北新幹線関係遺跡一覧

(位置一覧は第I図を参照)

所在地	遺跡名	調査対象面積	調査期間	取報告書名
一関市	機織山Ⅰ遺跡	3,500㎡	50.9.30~50.11.29	I
"	機織山Ⅱ遺跡	1,470	50.9.22~50.11.11	"
江刺市	中屋敷遺跡	5,000	48.12.10~48.12.22	"
"	鴻ノ巣館遺跡	6,400	49.6.24~49.10.23	V
"	力石遺跡	2,240	49.4.8~49.4.18	I
"	落合Ⅰ遺跡	2,560	49.4.18~49.8.6	"
"	落合Ⅱ遺跡	2,420	49.4.8~49.8.8	VI
"	宮地遺跡	3,600	50.9.1~51.7.26	IV
"	鶴羽衣遺跡	1,280	49.4.9~49.5.14	I
"	鶴羽衣台遺跡	960	49.4.19~49.5.10	"
"	瀬谷子遺跡	2,400	49.5.8~49.6.19	"
"	五十瀬神社前遺跡	1,600	49.6.4~49.7.30	"
"	谷地遺跡	2,720	49.7.25~49.9.3	"
北上市	八木畑遺跡	800	49.11.28~49.12.9	II
"	松ノ木遺跡	480	50.12.16~50.12.25	"
"	西野遺跡	5,000	50.9.1~50.12.25	"
"	南館遺跡	4,660	48.5.1~48.7.26	VI
"	鬼柳西裏遺跡	4,400	50.9.3~51.12.15	"
"	野田Ⅰ遺跡	3,000	51.8.6~51.8.28	II
"	野田Ⅱ遺跡	1,920	50.9.1~50.9.19	"
"	堀ノ内遺跡	2,400	50.7.7~50.8.30	"
花巻市	高松遺跡	2,000	50.6.4~50.7.9	"
"	八幡遺跡	1,800	51.10.7~51.11.25	"
石鳥谷町	高畑遺跡	2,720	49.10.25~49.12.20	V
"	大明神遺跡	3,680	49.10.25~49.11.22	II
"	大曲遺跡	1,920	49.10.25~49.12.12	"
"	幅遺跡	2,400	49.11.18~49.11.29	"
紫波町	野上遺跡	2,400	49.10.17~49.10.29	III
"	西田遺跡	29,600	50.4.26~52.12.15	VII
"	大銀遺跡	960	50.4.10~50.4.26	III
"	大日堂遺跡	2,240	50.5.16~50.6.10	"
"	田頭遺跡	1,760	49.9.5~49.10.16	"
"	杉ノ上Ⅲ遺跡	3,402	48.10.16~48.12.28	"
"	杉ノ上Ⅱ遺跡	4,276	48.10.16~49.1.29	"
"	杉ノ上Ⅰ遺跡	7,200	48.7.18~48.10.16	"
"	古館駅前遺跡	3,360	48.10.1~48.11.30	"
"	古館橋遺跡	4,200	48.9.18~48.12.8	"
矢巾町	白沢遺跡	3,726	48.7.20~48.9.29	V
"	又兵衛新田遺跡	2,080	49.10.18	III
"	高畑遺跡	640	47.11.24~47.12.2	"
"	下赤林Ⅰ遺跡	2,720	47.10.25~47.12.16	"
"	下赤林Ⅱ遺跡	3,200	48.11.13~48.12.19	"
"	下赤林Ⅲ遺跡	2,560	47.12.2~47.12.18	"
都南村	下永井遺跡	1,760	50.4.10~50.4.24	"
"	津志田遺跡	4,800	50.4.23~50.5.15	"
盛岡市	南仙北遺跡	800	50.4.10~50.4.25	"
"	厨川棚擬定地	4,600	51.5.17~51.10.16	"
"	前九年Ⅰ遺跡	5,150	51.4.23~51.6.3	"
"	前九年Ⅱ遺跡	3,400	51.4.19~51.6.2	"
"	長畑遺跡	6,370	51.4.9~51.5.15	"

※ 杉ノ上Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は1遺跡として登録してある。



1. 長畑道跡
2. 前九年口道跡
3. 前九年I道跡
4. 厨川橋礎定地

5. 南仙北道跡
6. 津志田道跡
7. 下永井道跡
8. 下森林田道跡
9. 下森林口道跡
10. 下森林I道跡
11. 高畑道跡
12. 又兵衛新田道跡
13. 白沢道跡
14. 古館橋道跡
15. 古館駅前道跡
16. 杉ノ上I道跡
17. 杉ノ上II道跡
18. 杉ノ上III道跡
19. 田頭道跡
20. 大日堂道跡
21. 大銀道跡
22. 西田道跡
23. 野上道跡
24. 福道跡
25. 大曲道跡
26. 大明神道跡
27. 高畑道跡
28. 八幡道跡
29. 高松道跡
30. 堀ノ内道跡
31. 野田II道跡
32. 野田I道跡
33. 鬼柳西道跡
34. 南館道跡
35. 西野道跡
36. 松ノ木道跡
37. 八木畑道跡
38. 谷地道跡
39. 五十瀬神社前道跡
40. 瀬谷子道跡
41. 鶴羽太古道跡
42. 鶴羽衣道跡
43. 宮地道跡
44. 落合II道跡
45. 落合I道跡
46. 力石道跡
47. 滝ノ原道跡
48. 中敷道跡

49. 横山山口道跡
50. 横山山I道跡

1 : 200,000

(第1圖) 東北新幹線開通路線位置圖

本 文

I 遺跡の位置と環境

1 地形と地質

西田遺跡は岩手県紫波郡紫波町犬割字西田に所在している。紫波町は県の中央部に位置しており、県都・盛岡市から南方約18kmにある。町の中央部を北上川、国道4号線、東北本線が南北に縦断している。遺跡の所在する紫波町の地形を大きく見ると、東側は北上山地、西側は奥羽山脈がそれぞれ南北に走っている。北上平野はこの東西の山地の間に広がり、北上川はその平野東縁をほぼ直線的に南流し、宮城県北東部の石巻湾に注いでいる。この北上川の支流、特に北上川中流域（盛岡市～前沢町）には奥羽山系から流出する支流が形成した大小の段丘化した扇状地の発達が見られる。これらのうちのいくつかは主として地形学的な面から何人かの学究によって研究がなされている。このうち全流域を対象とした第四系および地形の総合的な研究がある。^(注1)それによると、北上川中流沿岸の段丘群を地形、および構成層とそれを被覆する火山灰層の検討をとおして、古期から順に西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘の主要3群に分類している。西田遺跡所在の北上川中流域（紫波地区）ではこれら段丘に相当するものとして、石鳥谷段丘、二枚橋段丘、都南段丘が設定されている。

地形

次に本遺跡周辺の地形について第1図・地形分類概念図により述べてみる。本遺跡周辺の地形は大別して山地、丘陵地、台地（段丘）、河岸低地などからなるが、河岸低地を除けば北上川西岸の大半は台地（段丘）であり、これらは扇状地や旧河原が段丘化したものである。これらの段丘は三区分けされていることは既に述べたとおりである。

高位段丘（石鳥谷段丘）は、本遺跡の南・紫波町日詰付近および西部山地東縁の山麓部に断片的に分布する。日詰付近でこの段丘は3m以上の砂、粘土を伴う礫層とこれを覆う厚さ1m前後の火山灰層で構成され、構成礫層の風化は著しく進み、赤色を呈している。

中位段丘（二枚橋段丘）は、高位段丘の前面に広がり、極めて広面積をもって発達する。特に日詰付近以南に発達し、石鳥谷までの間は石鳥谷段丘にともなって分布する。二枚橋付近の模式地では厚さ6mの礫と、その上位の砂および灰白色粘土が約1.5mに覆い、厚さ3.5m以上の堆積物からなっている。

低位段丘（都南段丘）は、上位面に二枚橋礫層を削って生じた侵食面上に厚さ50cm内外の粘土層をのせる。これは花巻段丘と呼ばれているもので、西部後背山地東麓から東方に広範に発達す



- 1 古館橋 2 古館駅前 3 杉の上 I
 4 杉の上 II 5 杉の上 III 6 田頭 7 大日堂
 8 大銀 9 西田 10 野上

0 2 km



第 1 図 紫波南部地区の地形分類概念図

る。この花巻段丘より下位面にある段丘として都南段丘がある。都南段丘は、花巻段丘の外方またはこれを刻む河谷に沿ってみられるもので、日詰以北の北上川上流では一般に段丘崖の比高は小さく、河岸面との境界が不明確になる部分が多い。

北上川西岸の大半は扇状地や旧河原が段丘化したものであるのに対し、東岸は近接して北上山系に連なり、丘陵地と山地とからなる。その丘陵は佐比内丘陵と呼ばれ、朝倉山南縁から3～5 kmの幅をもって南方に広がっており、石鳥谷地区にまたがって位置する。段丘はこうした丘陵縁辺部に河岸段丘面として小面積に分布するが、一般に段丘の発達は不良で、小規模に点在するのみである。

以上のような地形区分の中で、西田遺跡の立地地形をみてみると次のようである。すなわち、北上山地東部は大小の沢や谷が複雑に入り込んだ小丘陵が発達しており、西田遺跡はその丘陵の西端を蛇行する北上川によって切離された小規模な丘陵上に立地している。更にこの遺跡が立地する丘陵の北・東縁は西の奥羽山脈に水源をもつ滝名川で画され、遺跡南東部で北上川と合流する。

このように西田遺跡付近の地形は山地、低位段丘、河岸低地に大別され、遺跡の立地面は河岸低地に囲まれた南北約600 m、東西約300 mの勾玉状の残丘にある。北側がやや幅広くなっており、丘陵東側に頂部平坦面が偏している。標高はおよそ102～104 m前後で、丘陵下の周囲水田面との比高は約10 mである。

地質

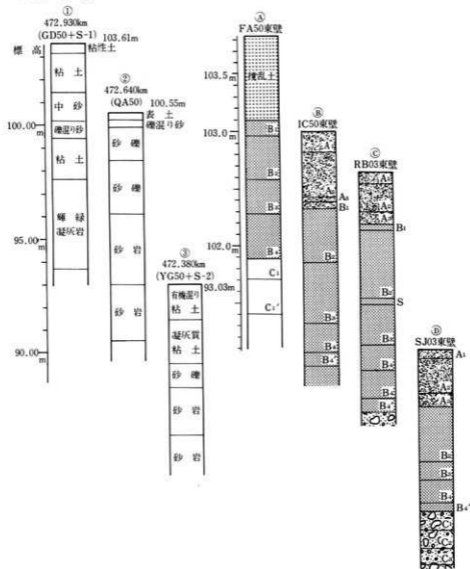
遺跡の地質構成は、国鉄・盛岡工事事務局所有による「東北新幹線東京起点（自469 K 280 m、至475 K 700 m）間地質調査・昭和48年作成」（第2図①～③）、および本遺跡調査における「土層観察資料」（第2図④～⑥）を参考にした。なお、①～③の土質名は前記地質調査報告書によった。

本遺跡が立地する丘陵は南部（第2図⑤・S J 03付近）は標高93 mの緩斜面となっているのに対し、中央部（第2図⑥・I C 50付近）は103 m前後の標高である。更に北部（第2図④・F A 50付近）は104 m弱の標高を示す。したがって北部から南部R区付近までは104～102 mの標高をもつが、S B付近において約1.5 mの段差をもつ地形となる。

地質構成は基本的には次のような様相をとる。

丘陵北部付近（G D 50）は表土、粘土質シルト層、砂礫層、基盤（輝緑凝灰岩）の3層である。中央部付近（Q A 50）では表土、砂礫、基盤（砂岩）の3層で、基盤の上位に薄い砂礫が堆積している。基盤岩は変成作用をあまり受けていない砂岩で、ホルンフェルスと同時代の堆積物である。しかし、丘陵南部緩斜面においては岩盤の上部に砂礫、凝灰質粘土が堆積する。しかし、前記地質調査報告書でも述べているように、当地区全体の地質は非常に複雑な様相を呈しており、たとえば10 mの近距離しかないにもかかわらず、岩盤深度の差が6 m以上もあつたり、近距離間

— 西田遺跡 —



部	区分	色 調	土 性 等
表 土 (腐植土)	A ₁	黒褐色 (10Y R ⁵ /W)	草根が集中している。粘着等の集結層
	A ₂	黒褐色 (10Y R ⁵ /W)	腐植が一掃されている層。A ₁ との層位面は明確でない。粘性にとむ。
	A ₃	暗褐色 (10Y R ⁵ /W)	A ₁ との境は不明確。下部はど黄味強い。
粘 土	B ₁	にぶい黄褐色 (10Y R ⁵ /W)	A ₁ との境界比較的明瞭。
	B ₂	黄褐色 (10Y R ⁵ /W)	B ₁ との層位面は明確でない。粘生痕が比較的多い。B ₂ ・B ₃ より粘性弱い。
	B ₃	黄褐色 (10Y R ⁵ /W)	白色粘土が入り込む。B ₂ ほどではないが粘生痕がある。酸化をうけている。
	B ₄	明黄褐色 (10Y R ⁵ /W)	B ₁ と比して白色粘土の入りが増える。酸化をうけているところが多い。粘性大。
	B ₅ *		B ₂ の中で白色粘土が大部分を占める。砂分が若干強くなる。
岩 石 (礫 等)	C ₁		石の風化した砂が主流。小礫も若干含む。
	C ₂		岩石層 (礫層)
	K		木の根による攪乱。
	S		酸化をうけた粘土が網状にみえるところ。

第2図 地質概念図

のボーリングした岩石を対比させるとその相関性がみられないなどの特異性がある。こうしたことから第2表に示した柱状図の中では地質の関係について表わせない部分もある。

以上の地質構成をもとに本遺跡での深掘りによる土層を観察すると、表土は三分(A₁~A₃)されるが、H区付近に限りA₂とA₃の間にもう1層入る。北部では一般的に表土が薄くなり、A₂層を欠くところが多く、一部ではA₁とA₂が直接つながる。地山を構成するシルト質粘土層も4分(B₁~B₄)され、下位に向うほど粘性が強くなる。シルト質粘土層の厚さは場所によって差異が認められ、丘陵中央部ほど厚くなる傾向にある。しかし北部の先端ではB₁層のみになって直接砂礫層につながる。また、B₂とB₃の区分は場所によって不明確になり、B₂を欠く地区も多い。

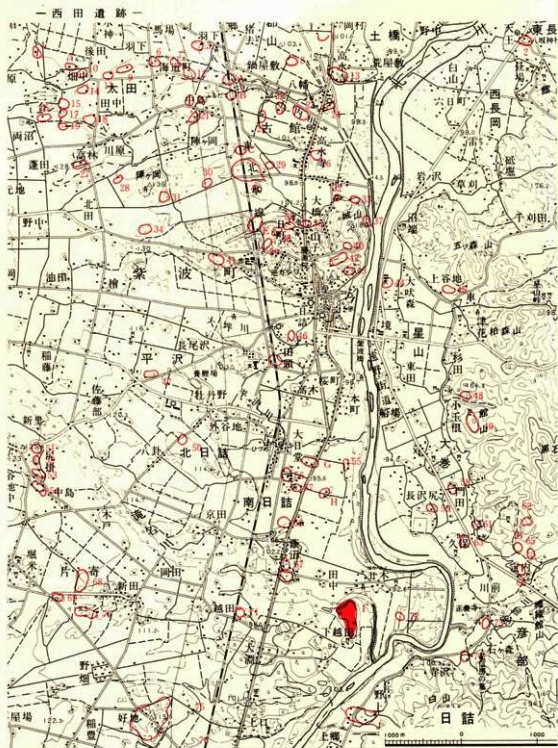
2 周辺の遺跡

第3図に示した図幅に含まれる遺跡の数は、現在86確認されている^(注2)。該地は紫波地区の北上川沿岸沿いの限られた範囲であり、東側に丘陵地帯を部分的に含むほかは扇状地性の段丘群と河岸低地で占められている。

縄文時代の遺跡は図幅に含まれる地形上の制約から相対的に数が少ない。しかし、図幅には含まれないもの本遺跡を中心として5kmの円内に含まれる縄文時代の遺跡は12を数えることができ、中期~後期にかけての時期のものがそのほとんどを占めている。この中で発掘調査されたものとしては本遺跡をはじめ、野上遺跡も縄文中期の遺跡として注目されている^(注3)。地形的にみるならば、中期の遺跡は丘陵の緩斜面や舌状台地の突端に立地するものが多い。後期の遺跡は分布調査においてはかなりの数が報告されているが、発掘調査されたものがなく、その実体は不明である。

弥生時代の遺跡は発見されておらず、縄文時代に後続するものは古代でも平安時代に属すると思われる遺跡になる。平安時代の遺跡はかなりの数が確認されているが、これもまた正式な発掘調査が行われたものは少なく、ほとんどが包含地として登録されている。本東北新幹線関係による発掘調査においては該当の遺跡の大半が平安時代のものであり、集落跡の一部となるものが多いことから、これら包含地とされている遺跡の中にも集落跡と推定されるものもある。

古代に属する館跡としては、安倍氏関係の城柵跡と伝えられる善知鳥館^(注4)があげられる。この遺跡は現在では原形をとどめてはいないが、一度発掘調査をしており、古代の居館跡として明らかにされているものである。



- A. 古館橋遺跡 B. 古館駅前遺跡 C. 杉ノ上Ⅰ遺跡 D. 杉ノ上Ⅱ遺跡 E. 杉ノ上Ⅲ遺跡
 F. 田頭遺跡 G. 大日堂遺跡 H. 大銀遺跡 I. 西田遺跡 J. 野上遺跡

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺の道跡地名表

番号	名 称	時 代	番号	名 称	時 代
1	岡 村 遺 跡	平 安	40	二日町吉兵衛遺跡	縄文(中期)
2	東長岡・天王遺跡	縄文(後期)	41	七久保遺跡	平 安
3	北 郡 山 遺 跡	平 安	42	吉兵衛館遺跡	中 世
4	長 根 遺 跡	縄文・平安	43	日詰・石田遺跡	平 安
5	太 田 II 遺 跡	平 安	44	間木沢遺跡	縄文(後期)
6	太 田 IX 遺 跡	平 安	45	犬吠森遺跡	縄文(後期)
7	太 田 X 遺 跡	土 師	46	日詰・牡丹野遺跡	縄文(後期)
8	北 郡 山 遺 跡	平 安	47	平沢境田遺跡	平 安
9	太 田 VII 遺 跡	平 安	48	花 立 遺 跡	縄文(中期)
10	太 田 V 遺 跡	縄 文	49	大 巻 遺 跡	中 世
11	杉の下の遺跡	平 安	50	北日詰・外谷地遺跡	平 安
12	太 田 XI 遺 跡	平 安	51	土館尻掛遺跡	縄文(中・後期)
13	高水寺遺跡	平 安	52	尻掛カワラバ遺跡	縄文(中・後期)
14	太 田 VI 遺 跡	平 安	53	尻掛 V ~ VII 遺跡	縄 文
15	太 田 I 遺 跡	縄文(早・前期)	54	片寄中島遺跡	平 安
16	両沼 II 遺 跡	縄文・平安	55	小路口遺跡	平 安
17	両沼 III 遺 跡	縄文(早・前期)	56	志和城擬定地	平 安
18	太 田 III 遺 跡	平安・中世	57	五郎沼遺跡	縄文(中・後期)
19	三 合 遺 跡	平 安	58	大巻間田遺跡	平 安
20	中 島 遺 跡	平 安	59	大巻長沢尻遺跡	縄文(後期) 平安
21	中 島 城 柵 跡	中 世	60	南日詰箱清水蛇塚	平 安
22	中 田 I 遺 跡	平 安	61	彦部小学校敷地遺跡	縄文(後期)
23	中 田 II 遺 跡	平 安	62	彦部赤坂古貫	平 安
24	稲 村 遺 跡	平 安	63	彦部久保遺跡	平 安
25	念 仏 堂 遺 跡	平 安	64	彦部館遺跡	中 世
26	古 屋 敷 遺 跡	平 安	65	彦部赤坂古貫	平 安
27	太 田 川 原 遺 跡	縄文(後期)	66	彦部暮坪遺跡	縄文(中・後期)
28	久々館遺跡	平 安	67	薩沼一里塚	江 戸
29	新 田 遺 跡	平 安	68	土手田・片寄 I ~ III 遺跡	縄文・平安
30	麗沼一里塚	縄文(後期) 平安	69	片寄野畑遺跡	縄文(後期) 平安
31	陣ヶ岡遺跡	縄文(後期) 平安	70	四ツ目 I ~ IV 遺跡	平 安
32	清水寺遺跡	縄文(中・後期)	71	片寄越田遺跡	縄文(中・後期) 平安
33	御堂前遺跡	平 安	72	甘木下川原遺跡	縄文(中・後期)
34	柳 原 遺 跡	平 安	73	元 町 遺 跡	平 安
35	善念寺山古貫	縄文(後期)	74	小 深 田 遺 跡	平 安
36	北七久保一里塚	江 戸	75	焼 場 遺 跡	縄文(中期) 平安
37	河 岸 場 遺 跡	平 安	76	熊 野 堂 遺 跡	平 安
38	善念寺山遺跡	縄文(後期)	77	善 知 鳥 館 跡	平 安
39	北七久保遺跡	平 安			

II 調査の概要

1 調査の経過

西田遺跡は当初、杉と雑木の混合林であり、遺物はわずかに丘陵南端部の緩斜面の小さな畑地から縄文片が数片発見されただけであった。しかし、丘陵全体の地形から考えて何らかの遺構の存在が想定されたことから、丘陵および南緩斜面、水田面内の新幹線ルート全域を対象に調査することにした。当初、2年間の調査期間を予定したものの、調査が進むにつれ丘陵全体が大きな遺跡であることが判明し、関係機関の協力を得て調査は3年に亘る第三次調査にまで及んだ。

調査は丘陵のほぼ中央を南北に縦断する新幹線ルートおよび直交して敷設される町道取付け予定地分を合わせ、約30,000㎡を対象として昭和50年より開始され、昭和52年の第三次調査をもって終了した。

以下、第三次調査に至るまでの経過とその概要を記すと次のとおりである。

(1) 第一次調査（昭和50年4月26日～8月30日、12月5日～12月15日）

調査は南緩斜面の畑地の発掘作業と全長600mにおよぶ全山の雑木払い作業とを並行して実施したが、最初の2ヶ月間はほとんど刈払い作業に費さざるを得なかった。飲料水にも不便なところであり、悪条件の中での作業が続いた。

遺跡南緩斜面の畑地を含む南側200mと北側150mは3m×3mのグリッド掘り、丘陵中央部250mはブルドーザーによる抜根、表土の除去を実施した。また、12月には南水田面の調査も行った。

地区ごとの調査概要は次のようである。

<北部地区>

土塁より南F～I区にかけては縄文中期の土器片多数の出土と共に多くのピットを検出した。

- ・ 1～1.5m程の径をもつピット約140
- ・ 0.2～0.5m程の径をもつピット約400

<中央部>

ブルドーザーによる抜根、表土の除去だけで遺構の有無は不明であった。遺物は土器数片のみである。

〈南部地区〉

滝名川べりに土器の分布が確認されていたことから、丘駁南の水田面も調査対象として行ったものである。水田作業終了後、約 1,500 ㎡を対象として調査を実施したが、遺物・遺構とも検出されなかった。

(2) 第二次調査(昭和51年8月4日～12月8日)

第一次調査で表土の除去のみを行った遺跡中央部については遺構検出および精査、更に北部地区の遺構群の調査を実施した。

〈中央部〉

前年度検出、調査した住居跡に隣接して更に1棟の縄文早期の住居跡を検出した。また、「すり鉢形」の断面を呈するピットを検出し、共に調査を完了した。

〈北部地区〉

前年検出され、精査ができずにいたピット約300を調査した。その結果、ピットの形状、規模、埋土の状況等により5種類に大別されることが判明した。

なお、調査がルートの範囲全域に及んだため、表土などの土捨て場所がなく、止むを得ず、遺構の有無確認を終了した地点に処理せざるをえなかった。

(3) 第三次調査(昭和52年4月11日～12月15日)

一、二次の調査をふまえ、特に本遺跡の集落全般についてその規模、性格をより明らかにすることを重点に調査を進めた。

〈北部地区〉

土塁より北側部分の表土の除去、遺構の検出作業を進めた。とくに排土の処理に困難を極め、北部斜面を土捨て場とすることにした。しかし、丘陵北端部は館址となる可能性が強かったため、全体の地形測量、斜面上の整地面の精査を実施し、更には縄文時代の遺物包含層の有無を確認した上で、土捨て場として利用せざるをえなかった。また、北部地区全域にわたるクリーニングと調査地東西に置かれていた土を除去し、用地ぎわまでの精査を行った結果、ピット2,500～2,800住居跡35棟など多くの遺構が検出され、その集落形態の特異性が明らかとなった。

2 調査の方法 (第4図)

調査は新幹線路線敷予定地内および付設される町道西田線予定地内を対象として行った。遺跡の位置する丘陵は約 173,000 m²を有するが、このうちルート内として対象になる範囲は 29,600 m²である。

調査は新幹線ルートの中心杭を基準としてグリッドを設定したが、丘陵中央部から北はルートが曲線となり、ルート中心線も曲線となるため、L地点を境に2本の基準線を設定した。各々の基準線はいずれも東京起点であるが、E～L地区(北部地区)は 472,9185 km～472,940 kmを、またL～Y地区(中・南部地区)は 472,490 km～472,520 km、およびこれらに直交する線を基準とし 3 m単位に割付け、30 mで1地区(ブロック)とした。したがって 3 m×3 mのグリッドを単位として市松状に表土の除去を行ったが、北(中)部のように遺構の分布状況によっては全面除去、精査を行った。(基準点、基準高については別記しているとおりである。)

また、地区名(ブロック名)については、丘陵北端部・滝名川左岸の微高地にも遺構の存在が予想されたことから丘陵上と一連の地区呼称を用い、微高地(東京起点・473,060 km)をA地区の原点とし、以降30 mごとに1地区を設定した。したがって丘陵北端部はE地区からとなり、丘陵南端はY区までとなった。

各地区とも手掘りによる粗掘を原則としたが、広範囲な面積と時間的な制約、また樹木の抜根作業などもあり、中央部は機械力に頼らざるを得なかった。

なお、序文・2、調査の方法で記した以外に本調査で実施したことは次のことである。

①調査の正確さをはかるため、遺り方測量と共に航空写真での遺跡地形図($\frac{1}{500}$)、および、遺構配置図($\frac{1}{40}$)を作成(アジア航測株式会社～本社・東京都世田谷区へ、昭和52年5月撮影、53年3月測図、オートグラフA7、ステレオプロッターA8)した。

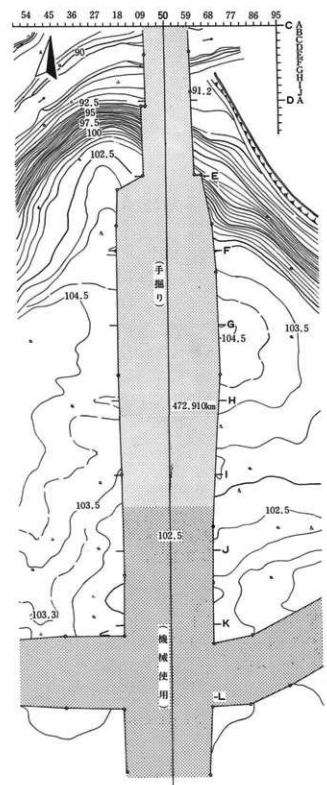
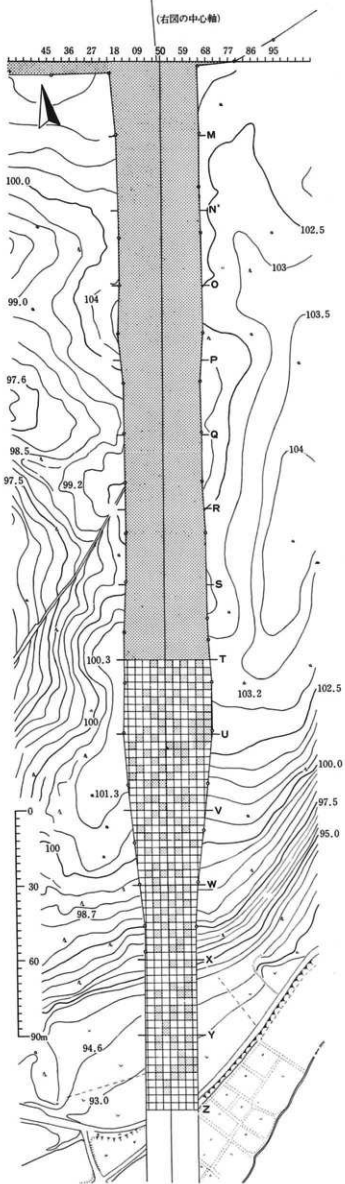
②遺構、特にピットがかなりの数になるため、精査の段階においては、「遺構カード」などを使用し、記録の統一と効率化をはかった。

3 調査の結果

3年間にわたる西田遺跡の調査の結果、次のような遺構、遺物が発見された。

<南部地区>

縄文時代早期の竪穴住居跡2棟、小竪穴状土壇5基、溝状土壇4基、および縄文土器、石器、石製品、また平安時代の竪穴住居跡2棟と土師器、須恵器片が出土した。



(左図-Mブロックに続く)

北部地区と南部-中央部地区の基準経緯は異なる。
(詳しくは序文2を参照)

第4図 グリッド配置図

<北部地区>

縄文時代中期の遺構、遺物が多数発見された。竪穴住居跡35棟、墓壇193基、柱穴状のピット群約1000個、貯蔵穴状土壇130基、陥し穴状土壇14基、小竪穴状土壇34基などである。また、前期末の遺構も若干検出されている。遺物は縄文時代前期末～中期中葉の各時期の土器、石器、土製品、石製品など多数出土した。特に墓壇からは滑石製の塊状耳飾り、ヒスイの垂飾り、人面を描いたと思われる三角形石製品などが出土した。

また、平安時代の遺構として竪穴住居跡2棟、甕棺墓1基が発見され、それに伴う土器も出土した。

中世の館跡に伴うものと思われる土塁、溝なども発見された。

以上のような遺構、遺物が発見されたが、西田遺跡は縄文時代中期の集落跡として位置づけることができる。

本調査での調査区域はこの集落の中央、やや西寄りにわたって縦断したかたちになっており、集落跡全体の半分以上が調査範囲に含まれているものと推定される。集落の規模は南北約120mにおよび、東西も地形等からみてほぼ同じ数値を示すものと思われる。

集落の構造は次のようになると考えられる。

即ち、集落の中央には墓壇と考えられる舟底形の土壇群が環状に並び、その外周には柱穴状ピット群が環状に巡る。このピット群は規模、形態等から4種類ほどに分類でき、中でも後世の掘立柱建物に類似する柱穴列がその大半を占める。柱穴状ピット群の外側には竪穴住居跡が環状に配置され、集落の北側、丘陵北端部には一部住居跡と交錯して貯蔵穴状土壇群が占地する形態をとっている。

なお、町道取付道路予定地においては、西側部分に溝状土壇8基を検出した。東側部分においては遺構の存在は確認できなかった。

(注)

- 1 中川 久夫(1963)「北上川上流沿岸の第四系および地形」—北上川流域の第四紀地史(1) 地質学雑誌・第69巻第811号、同(2)第69巻812号
- 2 岩手県教育委員会(1974)「埋蔵文化財地図」
紫波町(1972)「紫波町史」第1巻
- 3 岩手県教育委員会(1979)「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書・Ⅲ」(岩手県文化財調査報告書第35集)
- 4 紫波町教育委員会(1963)「岩手県紫波町善知鳥館調査報告書」

Ⅲ 報 告 に 際 し て

本遺跡での遺構名は、発掘調査の段階で検出したグリッド名をとって呼称し、それに一連の番号を付けて表記した（EA 501 ビット—EA 50 グリッド内のNo 1 ビット）。本報告書では、整理の段階で遺構の種別ごとに再編成するという作業を省略してあるため、住居跡を除くすべてのビット類は発掘調査の段階の遺構名をそのまま踏襲して様の表記となっている。したがって、発掘調査の段階で欠番となったものはそのまま欠番としてある。

遺構の種別は、平面形・断面形・大きさなどによって分類し、主に竪穴住居跡、大形ビット類（貯蔵穴状ビット）、大形ビット類とはやや形状の異なる小竪穴状土壇類、小判形土壇類（墓墳）、小形ビット類（柱穴状ビット）、溝状土壇（陥し穴状遺構）などに分けられる。本報告書では、これらの遺構の種別によって記述した。

本遺跡の発掘調査にあたっては、住居跡や大形ビット類から小形のビット類に至るまで全遺構の断面図を作成してある。遺構の絶対量が膨大であることから、各遺構の土層断面の記載が煩雑を極めることが予想されたため、土層註記を第一義とする遺構カードを作成し、その記載内容の統一に努めた。これらの土層註記を本書に掲載するに際しては、それに要する紙面が、相当量にのぼるため、一覧表を作成してそれに準じて記号化してある。また、竪穴住居跡やH・I区の住居域のビット類に関しては、資料が整っているにもかかわらず、日程と紙面の関係でその断面図の掲載を省略したものがある。

本書に集録した遺構・遺物の実測図は、次の要領に従って作成されている。

〔遺構の図面〕

遺構の平面図は遺構の種別ごとにまとめて作成し、できるだけ小縮尺で掲載するという意図から、本書とは切り離し付図としてB₁版ないしはB₂版で作成した。

付図 1 地形図	任意（原図—アジア航測）
付図 2 北部地区遺構全体配置図	1/20（原図—アジア航測）
付図 3 墓墳（小判形土壇）配置図	1/60
付図 4 貯蔵穴状ビット配置図	1/60
付図 5 長方形柱穴列（柱穴状ビット）配置図	1/60
付図 6 住居域の柱穴状ビット配置図	1/60

これらの各種遺構の断面図は本書に掲載し、その縮尺は1/60に統一した。

竪穴住居跡の図面縮尺は次のようになっている。

北部地区の縄文時代前・中期の竪穴住居跡	1/60
---------------------	------

南部地区縄文時代早期の竪穴住居跡…………… $\frac{1}{40}$

平安時代の竪穴住居跡…………… $\frac{1}{40}$

構状土壌、その他の小竪穴状土壌類はすべて $\frac{1}{40}$ で掲載してある。

〔遺物の図面〕

遺物の実測図及び拓影図は特に規格外のものを除き次の縮尺で統一した。

土器実測図…………… $\frac{1}{4}$

土器拓影図…………… $\frac{1}{2}$

土製品実測図…………… $\frac{1}{2}$

石器実測図…………… $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$

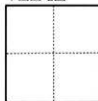
石製品実測図…………… $\frac{1}{2}$

遺物の整理は期間内に整理を終了するため、遺構に伴う遺物を中心とする整理方法となったが、土器は復元でき得るものについては極力図化を行った。しかし、土器は全般に保存が極めて悪く脆弱であったため復元作業は困難であり、バインダー17の処理が必要であった。石器、石製品、土製品は、遺構内資料を問わず極力図化する様心がけた。

報告書作成に当っては、各遺構と遺物が関連する掲載方法が必要であると考えたが、時間の制約により、各遺構の事実報告の後に「出土遺物」の項を設け、一括記載する結果となった。また個々の遺物の出土地点及び観察内容、計測値とは一覧表として表示した。

遺 構 カ ー ド

西田	ビット	担当	調査日
セクション略図 ()		()	平面図略図



層名	基本土土色	基本土土性	混入土土色	混入土土性	混入状況	しまり	構造	炭・焼土	備考
					%況				

所見

遺物出土状況

規 模
形 状
重 複
類 型
サ ン プ ル

IV 検出遺構と出土遺物

南部地区

3次に亘る調査の結果、南部地区では、丘陵地に南接する畑地から、平安時代の住居跡1棟検出され、丘陵上からは縄文時代の住居跡2棟、ピット5基、平安時代の住居跡1棟がそれぞれ検出された。また、2棟の縄文時代住居跡に挟まれた丘陵部斜面からは住居跡とほぼ同時期のものと思われる遺物集中包含区域1ヶ所が発見された。

〔1〕縄文時代の遺構など

1 住居跡および遺物集中包含区域

(1) 遺構

R F 62住居跡 (第6・7図、第2表、写真4)

〔位置〕西田山丘陵南半区域の頂部平坦面の西辺に位置している。南方部には、浅い谷を挟んで、T J 62住居跡が、ほぼ同じ平坦面上に位置している。

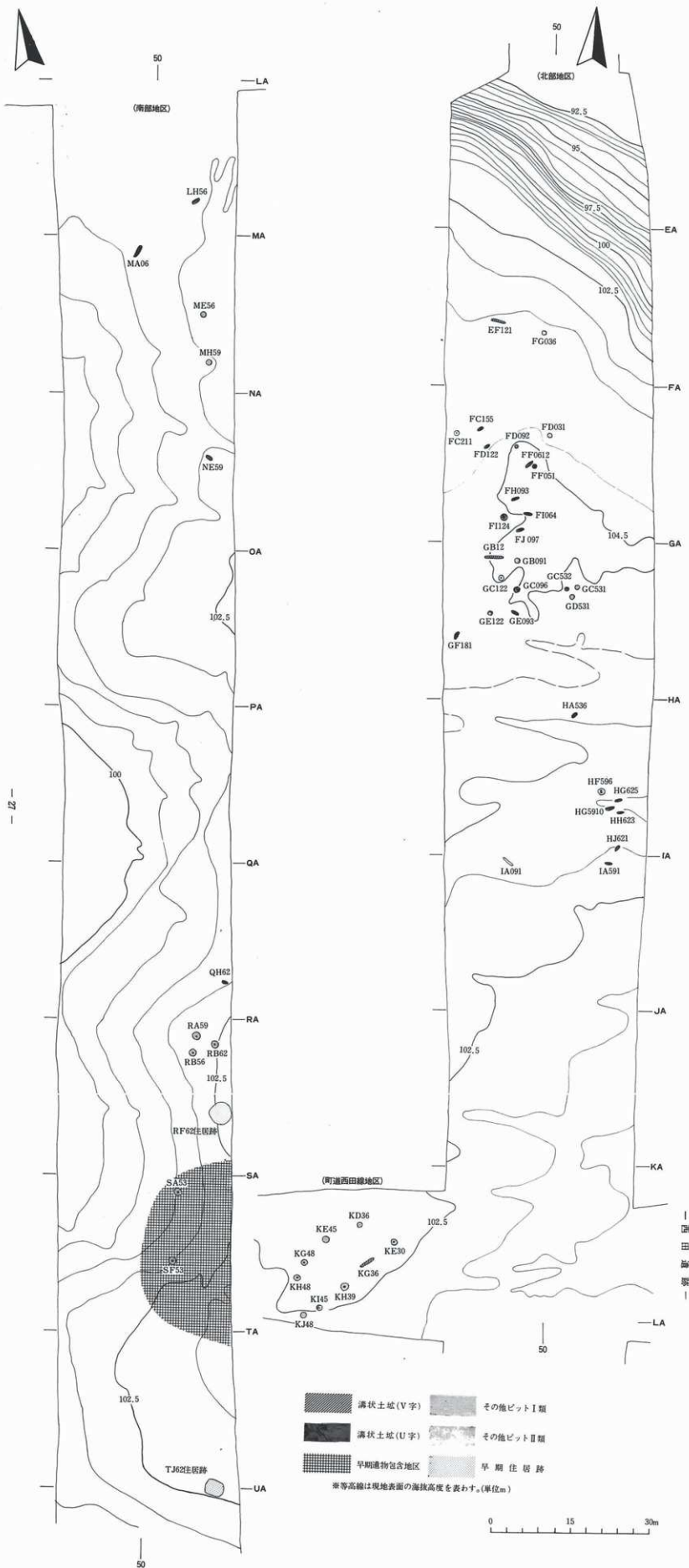
〔検出面〕現地表下約30cmの黄褐色埴土層（基本層序B₁相当層）の上面で検出された。

〔形状・規模〕平面が胴張り隅丸方形の竪穴住居跡である。規模は南北約4.8m、東西約4.7m、検出面からは深さ約0.2mで、壁面はやや緩く立ち上がり、床面は平坦ではなく、壁際が高く、中央部が、若干低まっている。壁際の周溝や入口施設の痕跡は認められなかった。

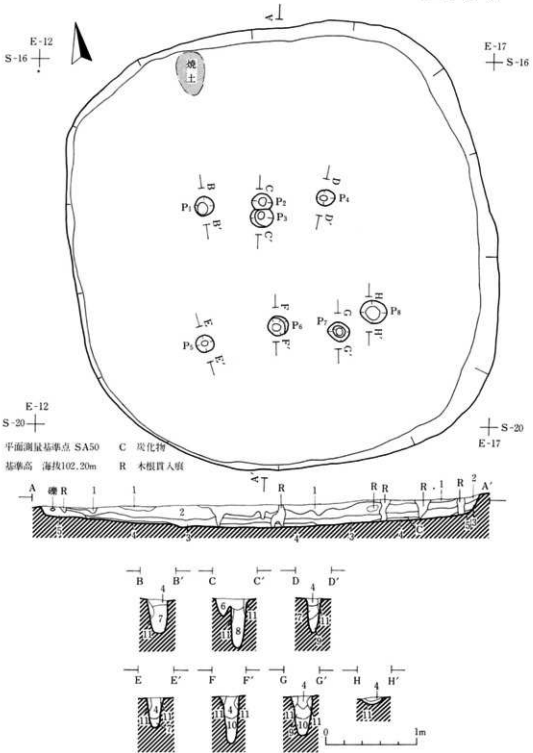
〔柱穴〕柱穴と思われるピットは床から合計8個発見されているが、上屋構造を支えた主柱穴と思われるピットは、そのうちのP₁・P₃～P₇の6個であると推定される。これらのピットは、3基一組みで、二列対応しながら、東西方向に並んでいる。そして、3基一組みのうちの中央部のP₃、P₆がそれぞれ、各柱列の内側に入り込んでいる。他のピットの性格については、建て替え柱、副柱などの性格も予想されるがよく解らない。ピットの形状はいずれも、底部が細長く尖った、杭穴の形態を示している。各ピットの規模は下記の第2表に示す通りである。

R F 62住居跡付属ピット一覧表

ピット名	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
(cm) 長径×短径×深さ	22×22×36	24×18×20	26×20×52	20×18×36	20×20×32	24×22×52	24×21×44	30×24×6



第5図 縄文時代の住居跡(早期)・小壁穴(その他ビッド)・溝状各遺構配置図



第6図 R F 62住居跡断面実測図

注記

1. 黒褐色 Hue10Y R3/3 クロボク質壤土、乾燥し、柔らかい。
2. 暗褐色 7.5Y R3/3 細礫混り粘土、やや硬い。
3. 暗褐色 7.5Y R3/3 砂質粘土、2と同じ硬さ。
4. 褐色 10Y R4/6+暗褐色 7.5Y R3/3 3層と同質の床土。
5. 褐色 10Y R4/6 壁部崩落土 地山より柔らかい。
6. 褐色 10Y R4/4 炭化物混り砂質粘土。
7. 褐色 10Y R4/4 4と同質だが暗い色をしている。
8. 暗褐色 10Y R3/4 炭化物混り軽粘土層、柔らかい。
9. 褐色 10Y R4/6 炭化物含み粘土。
10. 褐色 7.5Y R4/4 炭化物を多く含む。
11. 黄 褐 10Y R5/6 黒色土混り砂質粘土。

〔付属遺構〕柱穴以外の住居跡付属遺構としては、北壁際西寄りの床面で、長径約0.5m、短径約0.3mの平面長楕円形の範囲内に少量の焼土の混入した、暗褐色シルト質粘土層が0.05mの厚さで堆積している部分が発見された。一種の地床炉の可能性もあるが、位置や焼土の混入量から見ると、そうでない可能性も強い。

〔貼床、重複関係〕柱穴状ピットの中に建て替えの可能性のあるものが見られるものの、貼床や拡張、縮小工事の痕跡は認められなかった。また、他の遺構との重複も認められなかった。

〔埋土状況〕住居跡内の床部の埋土は、自然堆積した様相を示しており、木根貫入部の腐植土を除くと、大きく4層に分けられる。そのうち、上部3層は暗褐色を呈しているが、そのうちの最上層は、植生根の侵入により、幾分色があせ、しまりが粗である。他の2層はほぼ前者よりやや色濃く、締まりが密であるが、全体的な締まりの違いによって、さらに区分されている。最下層は、床面や壁際に堆積した薄い褐色系の砂含みの粘土層である。なおピットや焼土遺構などの埋土層も若干の違いはあるが、それについては第5図に示した。

〔遺物出土状況〕遺物は床部埋土のうち、主に4層以下の埋土に混在した形で出土している。特に住居跡南東隅の直径1m内外の範囲内では、チップ多数とともに尖底土器の底部破片が出土している。

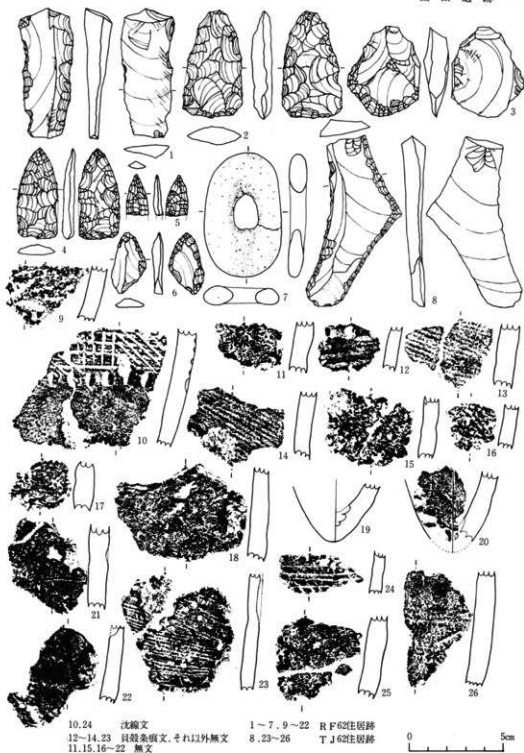
〔出土遺物〕貝殻緑文とか斜行沈線や格子状沈線と爪形刺突文の組み合わせ文様などを有する尖底土器片36片、石鎌1、石槍1、石錐1、搔器、削器などの刃器類2、石材類（フレーク、大小各種チップ類）1,185、中でもチップ類が圧倒的に多い。（第6図、第2表、写真5-1、2）

T J 62住居跡（第8・9図、第2表、写真4、5）

〔位置〕西田山丘陵南端の頂部平坦面の西辺部に位置している。

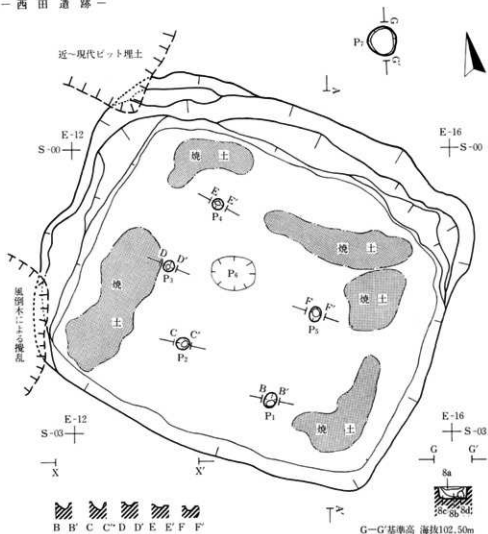
〔検出面〕現地地表下約45cmの黄褐色埴土層（基本層序のB₁相当層）上面で検出された。

〔形状・規模〕平面が北西-南東方向に長い隅丸長方形の竪穴住居跡である。規模は長辺約4.3



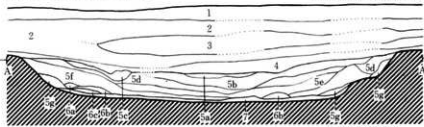
第7図 R F62住居跡およびT J62住居跡出土量物実測拓影(1)

— 西田 遺 跡 —



B B' C C' D D' E E' F F'

G-G'基準高 海拔102.50m



1. 遺跡 10V B2/3 赤土、焼土層、平安時代遺物あり。
 2. 遺跡 10V B2/2 平安朝前期遺物、平安朝中期遺物、中世の土器あり。
 3. 遺跡 10V B2/1 マグロの遺物層、平安朝中期の遺物層、平安朝前期の遺物層あり。
 4. 遺跡 10V B2/4 平安朝前期の遺物層、平安朝中期の遺物層あり。
 5a 遺跡 2.5V B3/4 平安朝前期の遺物層、平安朝中期の遺物層あり。
 5b 遺跡 2.5V B3/3 平安朝前期の遺物層、平安朝中期の遺物層あり。
 5c 遺跡 2.5V B3/2 平安朝前期の遺物層、平安朝中期の遺物層あり。
 5d 遺跡 2.5V B3/1 平安朝前期の遺物層、平安朝中期の遺物層あり。
 5e 遺跡 10V B4/4 赤土、焼土層、平安朝中期の遺物層あり。
 5f 遺跡 10V B4/3 赤土、焼土層、平安朝中期の遺物層あり。
 5g 遺跡 10V B4/2 赤土、焼土層、平安朝中期の遺物層あり。
 5h 遺跡 10V B4/1 赤土、焼土層、平安朝中期の遺物層あり。
 5i 遺跡 5V B5/4 赤土、焼土層、平安朝中期の遺物層あり。
 5j 遺跡 5V B5/3 赤土、焼土層、平安朝中期の遺物層あり。
 5k 遺跡 5V B5/2 赤土、焼土層、平安朝中期の遺物層あり。
 5l 遺跡 5V B5/1 赤土、焼土層、平安朝中期の遺物層あり。
 5m 遺跡 2.5V B3/2 平安朝前期の遺物層、平安朝中期の遺物層あり。
 5n 遺跡 10V B3/3 平安朝前期の遺物層、平安朝中期の遺物層あり。
 5o 遺跡 10V B3/4 平安朝前期の遺物層、平安朝中期の遺物層あり。
 5p 遺跡 2.5V B3/4 平安朝前期の遺物層、平安朝中期の遺物層あり。

A-A'基準高海拔
 X-X'102.20m
 X-X'はB-B', F-F'
 の統一基準線



第8図 Tj62住居跡断面実測図

m、短辺約3.8mで、検出面からの深さ0.4～0.55mを測る。床はほぼ平坦で、周りを囲む壁面は南東壁、南西壁では比較的原状がよく保たれており、かなり急に立ち上がっている。

しかし北東壁、北西壁では崩れ落ちた様になり、やや不規則な立ち上がりを見せ、全体的になだらかな壁面を形成しており、一部には、平坦面も見られる。壁際の周溝とか入口施設の痕跡は認められなかった。

〔柱穴〕柱穴と思われるビットが床面下の粘土層下部で5個確認されている。いずれも規模が小さく、浅い。その上、配列も不規則であり、住居跡の上層を支えた主柱穴かどうか疑わしい。

なお、住居跡に関連した遺構であるか不明であるが、住居跡の北東壁の中央部から1mほど北に離れたところに、直径約0.3m、検出面からの深さ0.24mの浅い円筒状ビットが発見されている。

T J 62 住居跡の付属ビット一覧表

ビット名	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
(cm) 長径×短径×深さ	16×13×6	15×12×8	12×10×4	12×12×4	14×12×4	48×36×3	30×30×12

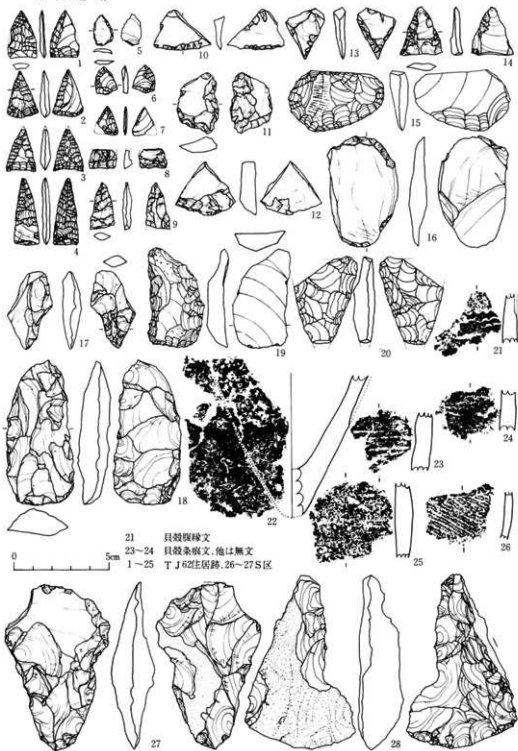
〔付属遺構〕床面中央部やや北寄りの部分に、平面形が0.48m×0.36mの東西方向に長い楕円形の範囲で、深さ0.03m前後の浅い落ち込みを示す部分が認められ、その直上部の埋土中からは焼土塊も検出された。位置関係から、住居跡に付属した炉である可能性が予想される。しかし、落ち込み部の底面が焼けておらず、今のところ炉跡に特定する事は難しい。

〔貼床、重複関係〕(粘土) 当住居跡では床部に炭化物末を少量含んだ黄褐色の砂質粘土層が0.02～0.05mほどの厚さで薄く貼られている。この土層は、遺構付近の地山層の土を主とした攪乱土で、やや明るい部分(Huelo YR%)と暗い部分(Huelo YR%)の斑状混合からなっている。粘土の下は当住居跡の当初床面になるわけであるが、これに関連した人工遺物は発見されていない。したがって、粘土された後の床面との相対的な時期差は判明するものの、絶対的な時期差については不明である。ただ、当初床面の部分に生活痕跡が強く認められない事からすれば、住居跡構築時か、その後間もない時期に地ならしなどのために貼られた可能性も考えられる。

〔重複関係〕他の遺構との切り合い関係についてを見ると、まず当住居跡の南西隅では上辺部の形状が後世の風倒木によって攪乱され、不明瞭になっている。また、北西隅の部分は黒褐色土層から掘り込まれた、ごく新期のビットによって破壊されている。

〔埋土状況〕当住居跡上を被う埋土層はほぼ自然堆積に近い状況で堆積している。埋土層は大きく分けて上下の二層群よりなるが、そのうち、上部をなす土層群は、クロボク質の黒褐色～暗褐色系の土層群で、一般に下にいくほど色が明るくなる。当住居跡付近では、下部との漸移層も含

— 西田遺跡 —



21 貝殻複線文

23~24 貝殻条線文、他は無文

1~25 T J 62住居跡、26~27 S区

第9図 T J 62住居跡出土遺物実測・拓影図(2)および
縄文時代遺物包含層その他の出土遺物実測図(1)

めて、都合5枚の層よりなるが、その中層部には縄文時代晩期～弥生時代の土器片や平安時代の土器片が含まれている。さらに下層部には、縄文時代早期の遺物も含まれている。いずれも住居跡の大部分が埋没した時期以降の堆積層である。

下部をなす土層群は暗褐色～褐色系の砂質埴土を主体とする層群で、一般に下にいくほど明色を帯びる。都合7枚の層よりなるが、当住居跡の大部分を埋める土層群で、住居跡に関わると予想される遺物は主にこれらの層群中より発見されている。

なお前述した貼床層の上面には火を受けた痕跡が部分的に見られる。特に床の近縁部ではところによって厚さ5～10cm内外の焼土が堆積している。

〔遺物出土状況〕住居跡内の遺物は大多数が前記の下部埋土層群から出土している。特にその下部からの出土点数が多く全出土遺物の約60%を数える。各層中の遺物はいずれも層中に分散、混在する形をなし、その平面分布には多少の粗密の差が認められるものの、ほぼ住居跡全域に亘っている。

〔出土遺物〕住居跡内から出土した遺物は総計1,100点の多きに達するが、そのほとんど大部分は長さ1～20mm未満チップを主体とする石材類である。石器の数は極めて少なく、石鎌8、搔器4、いわゆる石ヘラ1、削器1、用途不明の尖頭器状石製品1、フレックをそのまま使用したと思われるナイフ状石器の合計7などである。(第8図、第2表、写真5-1、2)

遺物集中包含区域 (第12・9～11図、第2表、写真4、5)

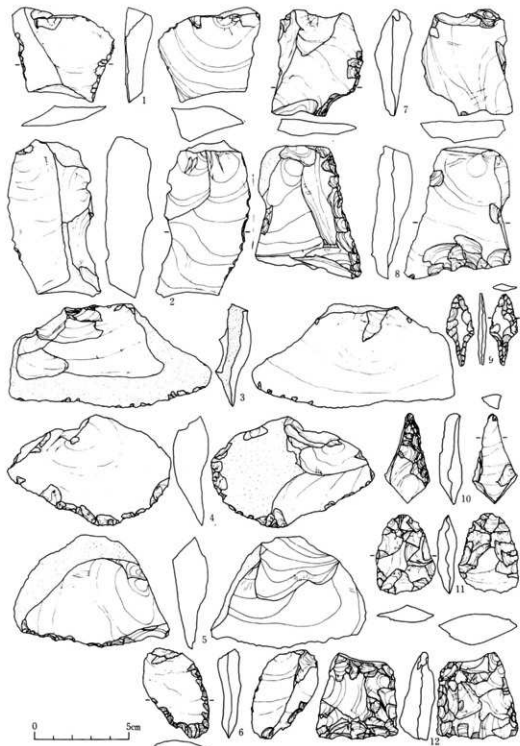
〔位置〕RF62住居跡の両住居跡のある頂部平坦面に囲まれ、西側に開口する浅い谷の上辺部、グリッド標示でいうとSA～SF50～65の各グリッド付近の緩斜面上に位置している。

〔検出面〕現地表下25～50cm内外、黒褐色のクロボク質埴土層上面付近。

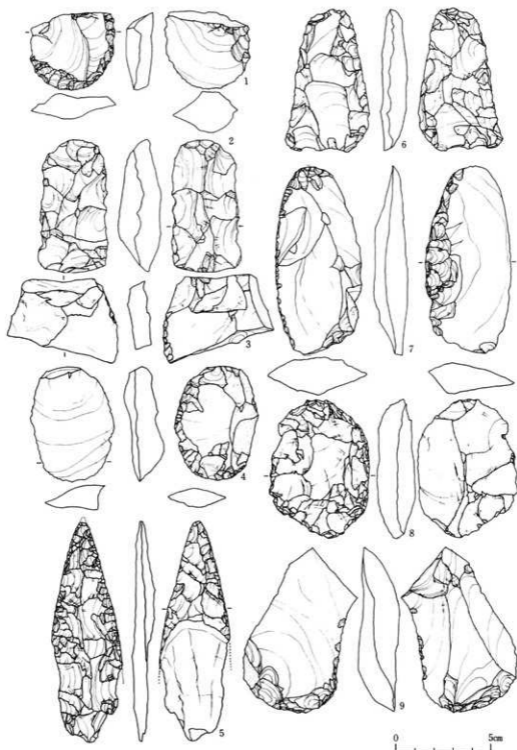
〔規模〕発掘していないので遺物包含区域の規模や包含層の分布範囲は不明であるが、調査部分の遺物分布の状況から見て少なくとも、南北約12m、東西約10m以上の規模を有し、さらに、東方～南部に広がるものと予想される。

〔層の状況〕この付近は剝土作業をブルドーザーで行っているので、検出時に既に層の大部分が削られた部分もあり、包含層自体の観察は充分になされていない。しかし、包含層の中心部を縦横に切断する形で入れた巾約0.3mのテストトレンチの所見では、層は部分的に色調を異にするものの、TJ62住居跡の上部埋土層の最下部層に相当する土層群からなる事が知られた。

〔遺物出土状況〕包含層中の遺物は層全体に散らばり、ちょうど層の形成に伴って、周囲から投棄されたり、流入し、埋没した様な状況を示し、一定の配置関係は認められない。ただ遺物分布の密度が、上辺部、そのうちでも特に、TJ62住居跡に近い方の斜面に多くなる傾向が見られた。

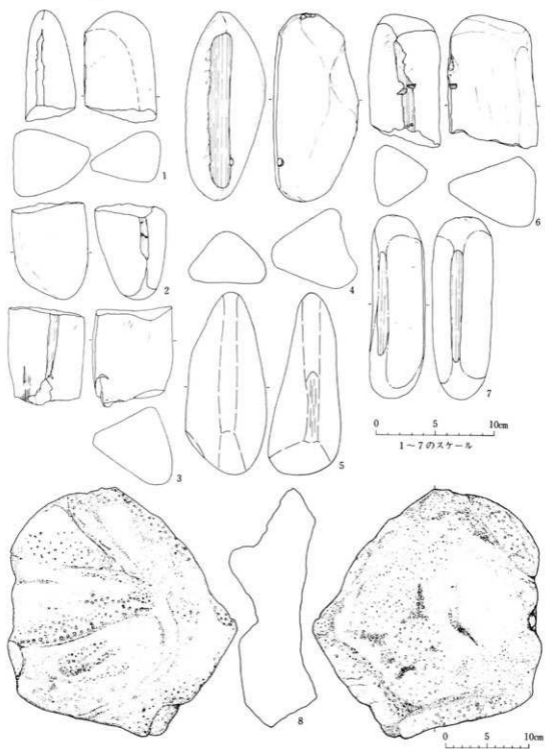


第10図 南部地区縄文時代遺物包含層その他の出土石器類実測図(1)



第11図 南部地区縄文時代遺物包含層その他の出土石器類実測図2)

— 西田遺跡 —



第12図 南部地区縄文時代遺物包含層その他の出土石器類実測図(3)

第 2 表 南部地区出土縄文時代石器類一覽表 (図示したもののみ掲載)

000(番号)	写真番号	品 類	出 土 区 域	種 別	最大径mm	最大幅mm	最大厚mm	重さg	材 質	残存状況	備 考	
T-1	5-2右	刃 部	R F 20区跡跡	2	6.1	2.7	1.2	16	凝灰質硬質頁岩	完 形	サイドスクレーパー	
2	→	→	→	→	5.7	3.15	1.0	17.3	硬質頁岩	→	→	
3	→	→	→	→	3.5	4.7	1.25	21.1	→	→	→	
4	→	→	→	→	4.8	2.1	0.65	6.8	珪質頁岩	一部欠	→	
5	→	→	→	→	2.15	1.2	0.45	0.9	→	一部欠	→	
6	→	→	→	→	3.2	1.7	0.5	2.5	→	完形?	→	
7	→	→	→	→	6.5	4.1	1.0	26.5	砂質凝灰岩	完形	400号埋跡、築物山か	
8	→	刃 部	T J 60区跡跡北壁	離 出 面 付 遺	9.2	4.0	1.1	31	珪質頁岩	→	サイドスクレーパー	
9-1	5-2左	石 部	T J 60区跡跡	S a ~ S f	2.5	1.5	0.25	0.9	炭 酸 鈣	一部欠	三角縁	
2	→	→	→	→	2.5	1.6	0.5	1.5	硬質頁岩	完形	→	
3	→	→	→	→	2.2	1.55	0.45	1.2	珪質頁岩	先端部欠	→	
4	→	→	→	→	5 a ~ 5 d	3.5	1.4	0.45	1.8	珪 質 頁 岩	ほぼ完形	→
5	→	→	→	→	5 a ~ 5 f	1.55	1.05	0.35	1.0	珪質頁岩	完形	広葉形
6	→	→	→	→	1.5	1.2	0.3	0.35	炭 酸 鈣	→	→	
7	→	→	→	→	残 10.8	0.35	0.35	珪質頁岩	一部欠	三角縁		
8	→	→	→	→	残 1.0	1.5	0.5	1.3	珪 質 頁 岩	先端部欠	→	
9	→	→	→	→	2.4	1.3	1.45	1.5	珪質頁岩	片	→	
10	→	刃 部	→	→	残 3.0	残 2.2	0.6	2.6	→	→	サイドスクレーパー	
11	→	→	→	→	2.7	2.0	0.4	5.4	→	完形	→	
12	→	→	→	→	残 2.8	残 3.2	0.8	8.5	硬質頁岩	片	→	
13	→	→	→	→	2.7	2.0	0.6	1.5	珪質頁岩	完形	→	
14	→	→	→	→	残 2.6	残 2.05	0.6	2.5	珪質頁岩	先端部残	→	
15	→	刃 部	→	→	5.0	3.2	1.1	18	→	完形	サイドスクレーパー	
16	→	→	→	→	5 f	5.8	3.6	1.3	23	凝灰質硬質頁岩	→	→
17	→	刃 部	→	→	5 a ~ 5 f	残 4.1	残 1.0	2.4	6.5	凝灰質硬質頁岩	与	サイドスクレーパー
18	→	→	→	→	5 a ~ 5 d	7.5	3.6	1.5	38	凝灰質硬質頁岩	→	→
19	→	刃 部	→	→	5 a ~ 5 f	3.2	2.9	1.1	16.8	珪質頁岩	→	→
20	→	→	→	→	5 a ~ 5 d	残 4.5	残 3.2	1.0	12.8	珪質硬質頁岩	与	三角縁を大変化した形
21	5-3	割 片	S 区遺物集中国包区域	黒褐色土層下部	8.8	5.6	2.4	65	珪質頁岩	完形	使用痕あり	
22	→	→	→	→	9.2	5.9	2.4	38	凝灰質硬質頁岩	→	→	
10-1	5-4	刃 部	S 区遺物集中国包区域	→	残 4.5	5.0	1.0	21	硬質頁岩	与	サイドスクレーパー	
2	5-4	割 片	→	→	8.7	4.5	2.5	80	→	完形	使用痕が見られる	
3	5-3	→	→	→	10.4	5.5	1.6	72	凝灰質硬質頁岩	→	→	
4	→	刃 部	S 区遺物集中国包区域	黒褐色土層下部	8.8	5.7	1.3	69	→	→	サイドスクレーパー	
5	→	→	→	→	5.9	4.0	1.8	54	硬質頁岩	→	→	
6	→	→	→	→	5.1	1.1	0.8	13	珪質頁岩	一部欠	→	
7	→	→	→	→	5.5	4.4	0.9	36	凝灰質硬質頁岩	与	→	
8	→	→	→	→	6.6	5.5	1.1	55	凝灰質硬質頁岩	完形	厚手のサイドスクレーパー	
9	→	→	→	→	3.8	1.4	0.4	1.9	珪質頁岩	ほぼ完形	有葉縁、比較的新しいものか	
10	→	刃 部	S 区遺物集中国包区域	黒褐色土層下部	残 3.7	残 1.2	9	→	小 片	厚手のサイドスクレーパー		
11	→	→	→	→	4.2	3.1	0.9	11	硬質頁岩	完形	サイドスクレーパー	
12	→	→	→	→	4.5	4.3	1.6	25	硬質頁岩	完形	平型小片、横断面凸レンズ形	
11-1	→	刃 部	S 区遺物集中国包区域	黒褐色土層下部	4.0	4.5	1.3	24	珪質頁岩	→	→	
2	→	→	→	→	7.0	3.6	2.1	50	→	→	→	
3	5-4	→	→	→	残 4.2	5.6	1.0	38	凝灰質硬質頁岩	与	サイドスクレーパー	
4	5-3	→	→	→	6.0	4.3	1.3	34	硬質頁岩	完形	エンドーサイドスクレーパー	
5	→	→	→	→	残 11.6	3.6	1.0	31.1	凝灰質硬質頁岩	与・一部欠	→	
6	→	→	→	→	7.5	4.1	1.4	41	硬質頁岩	完形	横断面凸レンズ状	
7	→	刃 部	R C 20アリア	炭 土 層	9.8	4.5	1.6	67	→	→	サイドスクレーパー	
8	→	→	→	→	7.3	5.2	2.0	61.1	凝灰質硬質頁岩	→	厚手のサイドスクレーパー	
9	→	→	→	→	8.7	4.9	2.0	81	硬質頁岩	→	サイドスクレーパー	
12-1	→	磨 り 石	R F 40区跡跡北壁	水 明	残 8.9	6.0	4.2	303	硬 質 頁 岩	与	断面二層形の磨の一種磨り割り	
2	→	→	→	→	残 8.3	5.3	5.7	433	→	→	→	
3	5-4	→	→	→	残 8.3	6.6	6.5	475	→	→	→	
4	→	→	→	→	15.9	7.2	6.6	832	→	完形	→	
5	→	→	→	→	16.2	7.5	5.7	620	石英質安山岩	→	断面二層形の磨の一種磨り割り	
6	5-4	→	→	→	残 10.3	7.5	6.0	732	→	与	断面二層形の磨の一種磨り割り	
7	→	→	→	→	15.4	5.1	5.2	560	→	完形	→	
8	4-4	石 皿 兼 砥 石	→	水 明	26.0	28.4	8.6	4400	凝灰質硬質頁岩	一部欠	片面石皿、片面砥石	

〔重複関係〕包含層の主要部分のすぐ西側には約8.2m離れて、平面円形のSA53、SF53の両ビットが、北々東～南々西方向に並んでいる。これらのビットは底部中央部に柱穴を有する深鉢状ビットである。包含層との層位関係は確認されていないが、位置的な関係や埋土中の遺物などから、時間的な関連性が予測される。(以上のビットの詳細は、2の項を参照せよ。)

〔出土遺物〕包含層中に含まれる遺物としては尖底土器片、各種の打製石器類、擦り石、石皿などの石器類やチップ・フレックなどの石材類があるが、なかでもチップを主体とする石材類の占める点数が多い。(第9～11図、第2表、写真4-1、5-3、4)

(2) まとめ

a 住居跡の特徴

発見された竪穴住居跡はいずれも、丘陵上を被うクロボク質の埴壇土層が、下部の褐色～黄褐色砂質埴壇土層へと移行していく境界部付近から掘り込まれている。竪穴の形は隅丸の長方形ないしは胴張り型の隅丸方形である。深さは場所の違いもあって、一定せず、RF62住居跡では、約0.2m、TJ62住居跡では0.4～0.55mを測る。いずれも周溝や入口施設は確認されていない。床面は前者の場合中央部に向かって幾分低まる傾向が見られるものの、両者とも大体平坦に近いと云えるだろう。

住居跡に伴うと思われるビットはRF62住居跡では5、TJ62住居跡では8それぞれ発見されている。上屋を支えた支柱穴と思われるビット配列は前者で三つ一単位、2列、合計6の配列が認められたものの、後者ではビット自体が浅い土に支柱穴を思わせる様な規則的な配列関係が認められなかった。この事から後者が住居跡であるか疑問も生ずるが、立地や規模・形状・埋土などの全般的な状況から見て、住居跡としてはほぼ間違いのないであろう。

いずれも両住居跡に伴う他の付属遺構としては、一種の焼土遺構があり、RF62住居跡では床面中央部付近から、TJ62住居跡では北東壁際の西寄り床面からそれぞれ発見されている。いずれも、焼土量が少なく、炉であるかどうか、今のところよく解らない。関東地方に於ては、縄文時代早期の竪穴住居跡に、野外炉・炉穴などの施設跡の伴う例も知られるが、今回の調査区域内では、それに類似した施設跡は発見されなかった。

住居跡の建て替えなどに関する確かな例は発見されなかった。ただTJ62住居跡では厚さ5cm内外の粘土層が見られた。しかし、その目的や時期差については、資料不足で今のところよく解らない。

また、住居跡廃絶時の状況に関わるか不明であるがTJ62住居跡では床面に火を受けた痕跡が認められる。特に床面の近縁部には、厚さ5～10cmの焼土層が散らばっている。しかし、遺構内の埋土状況は両住居跡とも自然状態のまま埋没していった事を示している。

b 住居跡および遺物集中包含区域の出土遺物の特徴

前記2住居跡と両者の中間部に広がる遺物集中包含区域内の出土遺物は位置関係や含まれている土器片から見て、各々ほぼ同時期ないし近接した時期の一括遺物と推定される。これらの出土遺物に共通して云える事は、総体の中に占める土器類の割合が極端に少ない事である。その上、石器も少なく、0.2~2cm未満のチップを主体とする石片数が圧倒的に多いという事である。例えば、土器類はほとんど磨滅の著しい尖底土器の細片であるが、3者で総数2,200点にも及ぶ遺物中の50点にも満たない。石器類も総数76点とやや多いものの、全体から見るとかなりやはり少ない。石器類は総数76点のうち、石皿状砥石1、三稜形状の擦り石8以外の残り67点は石鏃10、石槍1、削器、搔器類13、いわゆるへら状石器3、その他の未製品、器種不明の破片、使用痕のある剝片類など40点の各種打製石器類で占められており、磨製石斧の様な磨製石器類は発見されなかった。

石器類の材質は、図中にも示したが打製石器以外の石器では安山岩類や流紋岩などの火山岩類がほとんどであるのに対し、打製石器類では、黒色、暗褐色、灰色を帯びた各種の硬質頁岩類が多用され、一部に玉髓、流紋岩や黒曜石その他が見られる。この傾向は石材類でも全く同じである。以上の各岩種のうち、安山岩類、流紋岩、黒曜石、硬質頁岩類などの最も近い主要産地は奥羽山地であるが、おそらく、その方面ないし、そこから流れでる各河川沿岸部から採集してきたものと推定される。

以上の様な遺物組成の状況は、一つには、発掘時に古い時期の住居跡であるという事で、意識的に細密な調査を実施した事にも起因すると思われる。しかし、チップの総数の膨大さはやはり、別の理由、例えば、各遺構内ないし、その近辺で石器類の加工が頻繁に行われていた事などが考えられよう。また住居跡などに於けるチップの出土が主に埋土層に限られるという事も住居跡の埋没過程と石器加工作業が併行する関係にあったためという説明ができればよい。さらに石片数の中で大振りのフレークやコアが比較的少ない理由については、付近で行われた加工作業が、石材の素割り作業などではなくてチップングを主とした整形、仕上げ作業であったという仮定もできる。いずれ、以上の考えはごく限られた調査範囲内での資料から立てられた憶測的な仮説に過ぎないが、その実態については、今後の周辺部あるいは他の遺跡の調査によって、漸次明らかになってゆくであろう。そして、その事は、また、出土した多数の石片類の寸法の統計分析、分布状況の観察あるいは剝離加工の実験的研究などの作業によってもある程度解明されるであろう。

e 住居跡および遺物集中包含区域の所属時期

aの項で、前記各遺構について、ほぼ同時期の所産であるとしたが、この様な想定が成り立つとした場合、どれくらいの時期を考えるのが妥当であろうか。その問題について、出土した遺物の中でも時期的な特徴が著しく現われる土器類を中心にその所属時期を考えて見たい。

各遺構から出土した土器類は大部分保存状態の極めて不良な胴体部破片である。口辺部破片、

尖底部破片は2～3点のみである。器面の状態の比較的良好な破片で見ると、一部に貝殻腹縁文や幾何学的沈線文の破片も見られるが、大部分は無文ないし貝殻条痕文の施された破片である。施文はいずれも器壁外面に限られている。これらの土器片は、いずれも東北地方北部の縄文時代早期中葉に位置付けられる貝殻文尖底土器の破片であると思われる。貝殻文尖底土器は全形が砲弾状の土器であるが、文様の違いにより、現在、幾つかの種類に細分編年されている。採集された資料の中には上記編年上、青森県などを中心とするいわゆる白浜式に近い文様のものが見られる。その事から、詳細については今後の検討を要するにしても各遺構の時期を大体その時期の近辺に位置付ける事が可能であろう。

d 住居跡および遺物集中包含区域の性格

以上の様な时期的な位置付けの結果、前記各遺構の性格としてどのような事柄が考えられるであろうか。上記各遺構はいずれも西田山丘陵南半の頂部平坦面の西辺に位置している。2次に亘る調査では他の同時期遺構を発見する事はできなかったが、調査区に東接する頂部平坦面に同時期の住居跡その他の遺構の埋没している可能性が強まった。そしてこれらの仮想遺構群と発見された遺構群は一緒になってある期間共存し、一つの小集落を形成していたものと推測される。

その場合、遺物集中包含区域の性格としては集落に伴なう、一種のゴミ捨て場様な施設が考えられるかも知れない。また、时期的な関係は不明であるが上記遺構の近辺に位置する、底部中央に柱穴を有する深鉢状ビットもこの集落跡に関連した施設であるかも知れない。

いずれ、詳細な事実の解明は今後の調査に期待せざるを得ないが、北上川上中流域で縄文時代早期中葉の住居跡群が調査された例は現在のところ非常に珍らしく、注目に値する。もちろん、西田遺跡の調査以前にも該期遺跡の調査はなされているが、住居跡との関連で調査された例はほとんど無かったといってよい。それだけに2次に亘る本調査の結果は、北上川上中流域に於ける該期集落跡の立地とか人々の生業や道具のあり方などの問題に関連する新たな資料と知見をもたらしたという意味で大変重要であり、今後の資料活用に期待される面が大きいと云えよう。

2 小竪穴状遺構（第13図、写真6）

小竪穴状遺構の中で後述するフラスコ状ピットとビーカー状ピット以外のピットをその他のピットとして取り扱う。その他のピットとしては調査区全域で29個の検出をみた。これ等をその規模、形状より2つのタイプに分類した。

円形のプランを呈し、断面が逆台形をしたピットをⅠ類、円形のプランを呈するが、壁が垂直で、きわめて浅いピットをⅡ類とし、底面に小穴をもつものをa、小穴を有しないものをbとした。南部地区ではⅠ類のピットが7個検出された。以下遺構毎に記述する。

ME56ピット—Ⅰa類—

開口部径約120cm、底部径約60cmの共に円形のプランをもち、深さは約60cmを測る。壁は底部より開口部に向けて開き気味に32°程の傾斜で直線的に立ち上がり、逆台形の断面を呈する。埋土は3層に大別され、褐色土と暗褐色土を主体とした自然堆積を示す。炭化物等の混入はなく、遺物の出土もない。

MH59ピット—Ⅰa類—

ME56ピットに近接して検出されたピットである。開口部径約110cm、底部径約50cmの円形のプランを呈し、70cm程の深さを測る。壁は開き気味に開口部に向けて直線的に立ち上がり、逆台形の断面を呈する。埋土は褐色土と暗褐色土を主体とした自然堆積を呈する。遺物の出土はない。

RA59ピット—Ⅰa類—

RF62住居跡（縄文早期）の北側12m程の位置に検出されたピットである。開口部径150cm、底部径約100cmの円形のプランをもち、深さは約100cmを測る。底面のほぼ中央には径15～20cm、深さ20cm程の小穴をもつ。壁は底部より開口部に向けてほぼ直線的に立ち上がり、逆台形の断面を呈する。埋土は4層に大別され、下層は暗褐色と壁の崩落土が入りこんでやや乱堆積である。遺物の出土はない。

RB62ピット—Ⅰa類—

RA59ピットに近接して検出された。規模は開口部径110～120cmの円形プランをもち、底面は約110×110cmの不整隅丸方形のプランを呈する。深さは約110cmを測る。底面のほぼ中央には径約20cm、深さ20cm程の小穴をもつ。壁は底部より開口部に向けてやや開き気味にはほぼ直線的に立ち上がり逆台形の断面を呈する。埋土は5層に区分され、上層には炭化物の混入がみられ、下層は壁の崩落土がかなり入りこんでいるが自然堆積である。遺物の出土はない。

RB56ピット—Ⅰa類—

RA59、RB62の各ピットに近接して検出された。開口部径約140cmの円形プランをもつが、

底部は約80×100 cm程の円形～楕円形のプランを呈する。深さは約110 cmを測る。底面のほぼ中央には径20 cm、深さ30 cm程の小穴をもつ。壁は底部より開口部に向けて開き気味に直線的に立ち上がり、逆台形の断面を呈する。埋土は5層に大別され、自然堆積の状態を示すが、下層は壁の崩落土が入りこんでいる。遺物の出土はない。

S A 53ピット-1a 類-

R F 62住居跡（縄文早期）の南16 m程の地点に検出されたピットである。開口部径約180 cm、底部約100 cmの円形のプランを呈し、深さは約100 cmを測る。底面のほぼ中央には径約20 cm、深さ20 cm程の小穴をもつ。壁は底部より途中迄程まではほぼ垂直に立ち上がり、以後は開き気味に開口部に至る。埋土は5層に大別され、自然堆積の状態を呈するが、下層は壁の崩落土が入りこんでやや乱堆積である。遺物の出土はない。

S F 53ピット-1a 類-

S A 53ピットよりさらに12 m程南に検出されたピットである。開口部径約150 cm、底部径約120 cmの円形のプランを呈し、深さは約100 cmを測る。底面の中央部には径約20 cm、深さ15 cm程の小穴をもつ。

壁はS A 53ピットと同様底部よりはじめやや垂直に立ち上がり、途中より開き気味に開口部に至る。埋土は4～5層に大別され自然堆積の状態を呈するが、中央小穴部分には柱の痕跡が黒色土となって柱出された。遺物としては埋土上層より縄文時代早期土器片、チップ等が若干認められたが本遺構に相伴するものではない。

3 溝状土壌（第13図、写真6）

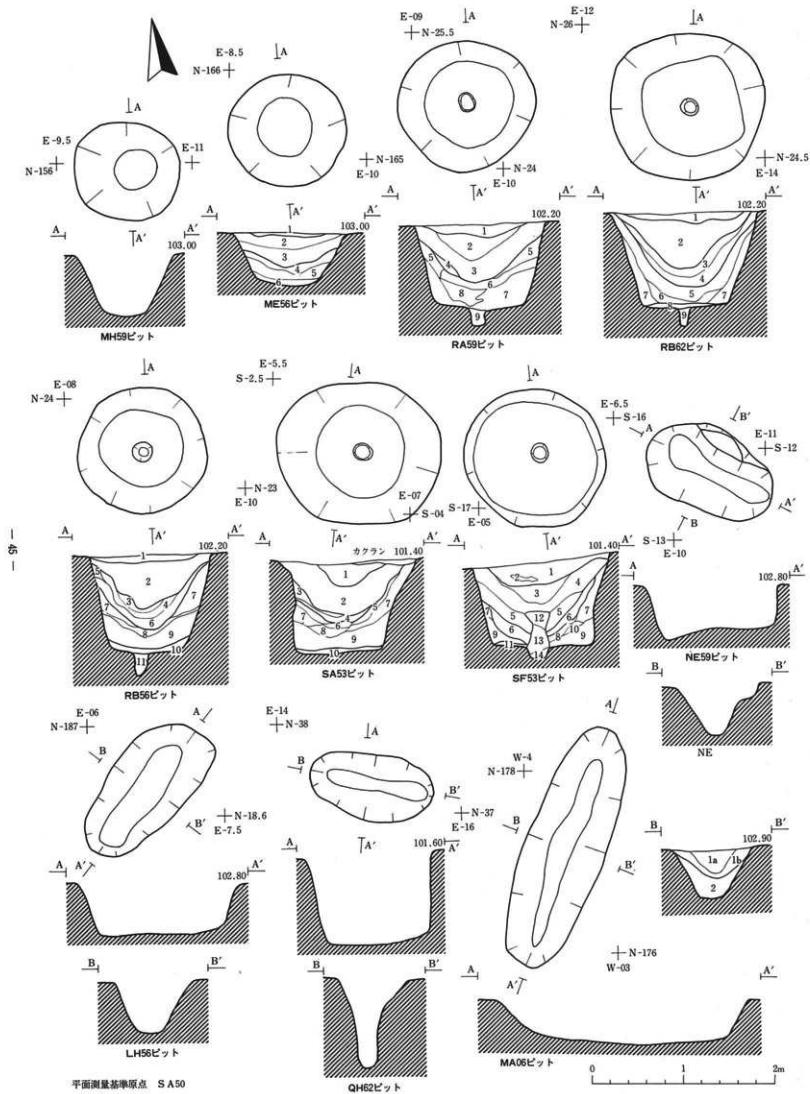
溝状土壌としては調査区全域で20基検出された。平面形はいずれも楕円～長楕円であるが、断面が「V」字状を呈するものと「U」字状のものと2種類ある。南部地区では「U」字状の断面を呈するもの4基である。以下各遺構毎に記述する。

N E 59土壌

M H 59ピットの南18 m程の地点に検出された。長軸約150 cm、短軸約80 cmの規模をもち、深さは約60 cmを測る。横断面は「U」字である。長軸方向はN-49°-Wである。遺物の出土はない。

Q H 62土壌

R F 62住居跡（縄文早期）より約20 m、R B 62ピットよりは10 mそれぞれ南に検出された。長軸約100 cm、短軸約70 cm程の規模をもち、深さ約100 cmを測る。横断面は非常に細い「U」字状を呈する。長軸方向はN-64°-Wである。遺物の出土はない。



第13回 小壁穴(その他ピット)・溝状各遺構横断面図

L H 56 土塊

ME 56 ビットの北約20 mの位置に検出された。長軸約180 cm、短軸約90 cmの規模をもち、深さは約60 cmを測る。横断面は「U」字状を呈する。長軸方向はN-41°-Eである。遺物は皆無。

M A 06 土塊

L H 56 土塊の南西約10 mの緩斜面に検出された。長軸約280 cm、短軸約90 cmの長楕円のプランをもち、深さは約50 cmと浅い。縦断面はやや舟底状を呈し、横断面は浅い「U」字状を示す。埋土は黒褐色と暗褐色を主体とした自然堆積状態を示す。長軸方向はN-33°-Eである。遺物の出

土はない。 埋 土 注 記 表

ME 56 ビット			別No	土 色	土 性、そ の 他		
第1層	1	黒 褐色(7.5 Y R 5/6)	別3層	4	暗 褐色(7.5 Y R 5/6)	壁の崩落土 暗褐色土と黄褐色土の混合土 No 6 に近似 岩石の風化土 ゴッポツしてしまりなし 黒褐色土と黄褐色土の混合土	
第2層	2	暗 褐色(7.5 Y R 5/6)	-	5	黄 褐色(10 Y R 5/6)		
-	3	-	-	6	-		
第3層	4	黒 褐色(7.5 Y R 5/6)	第4層	7	黄 褐色(10 Y R 5/6)		
-	5	-	-	8	-		
-	6	-	-	9	橙 色(7.5 Y R 5/6)		
RA 59 ビット			第5層	10	黒 褐色(10 Y R 5/6)		
第1層	1	黒 褐色(10 Y R 5/6)	第6層	11	黒褐色土と黄褐色土の混合土		
第2層	2	暗 褐色(7.5 Y R 5/6)	SA 53 ビット				
-	3	黒 褐色(7.5 Y R 5/6)	第1層	1	黒 褐色(10 Y R 5/6)		シルト
第3層	4	暗褐色土と黄褐色土の混合土	第2層	2	暗 褐色(7.5 Y R 5/6)		黄褐色土が粒状に混入 No 4 と近似 暗褐色土と黄褐色土の混合土 岩石の風化土 No 4 と近似 No 6 に近似 ゴッポツしてしまりなし
第4層	5	黄 褐色(7.5 Y R 5/6)	第3層	3	- (7.5 Y R 5/6)		
-	6	-	-	4	- (7.5 Y R 5/6)		
-	7	橙 色(7.5 Y R 5/6)	第4層	5	黄 褐色(10 Y R 5/6)		
-	8	-	-	6	-		
-	9	黒褐色土と黄褐色土の混合土	-	7	橙 色(7.5 Y R 5/6)		
RB 62 ビット			-	8	-		
第1層	1	黒 褐色(10 Y R 5/6)	第5層	10	黒 褐色(10 Y R 5/6)		
第2層	2	-	SF 53 ビット				
第3層	3	暗 褐色(7.5 Y R 5/6)	第1層	1	黒 褐色(10 Y R 5/6)	シルト	
-	4	暗褐色土と黄褐色土の混合土	-	2	黒褐色土と暗褐色土の混合ブロック		
第4層	5	黄褐色土(10 Y R 5/6)	第2層	3	黒 褐色(10 Y R 5/6)	炭化物若干含む	
-	6	-	-	4	暗 褐色(7.5 Y R 5/6)	砂礫若干含む	
-	7	橙 色(10 Y R 5/6)	-	5	黒 褐色(7.5 Y R 5/6)	炭化物若干含む	
第5層	8	黒 褐色(10 Y R 5/6)	第3層	6	暗褐色土と黄褐色土の混合土	No 6 と近似するブロック 岩石の風化土 No 8 と近似 ゴッポツしてしまりなし ゴッポツしてしまりの悪いよれ土	
-	9	黒褐色土と黄褐色土の混合土	第4層	7	黒 褐色(10 Y R 5/6)		
RB 56 ビット			-	8	橙 色(7.5 Y R 5/6)		
第1層	1	黒 褐色(10 Y R 5/6)	-	9	-		
第2層	2	暗 褐色(7.5 Y R 5/6)	-	10	-		
第3層	3	- (7.5 Y R 5/6)	第5層	11	黒 褐色(10 Y R 5/6)		
			第6層	12 ~14			

〔2〕平安時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

Y D 56住居跡（第14図、写真7）

〔遺構確認面〕 耕作土の下層、黄褐色（砂質埴土）土層で検出、遺構掘込面は耕作等による削平のため検出不能であった。

〔保存状況〕 遺構は10cm弱の掘り込みを残すのみで上部は完全に削平されていた。

〔平面形、長軸方向〕 隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-33°-Eである。

〔規模〕 長軸（南北）4 m、短軸（東西）3.3 mを測る。

〔堆積土〕 遺構内の堆積土は削平のため最下層を3～4 cmほど残すのみである。基本的には暗褐色土層で粘性はなく、焼土を若干含んでいる。

〔壁、床面〕 残存壁高は5～6 cm内外を測り、傾斜をもって立ち上がる。床面はあまり固くなく、堆積土との間に「肌分かれ現象」はみられず、部分的に焼土を混入した貼り床が認められた。

〔柱穴〕 床面上に合計24個のピットを検出した。このうちいずれが柱穴となるか断定はむづかしいが一応、配列の規則性などからP₁～P₄がそれに当るものと思われる。

〔カマド〕 カマドは東壁の中央部に構築されており燃焼部だけを残存し他の施設は検出できなかった。一方P₈を用いた古いカマドの存在も考えられる。

〔貯蔵穴〕 P₅は新しいカマドの貯蔵穴と想定され、P₈は古いカマドの貯蔵穴とみられる。

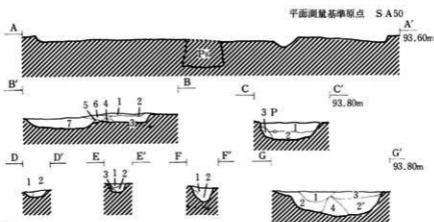
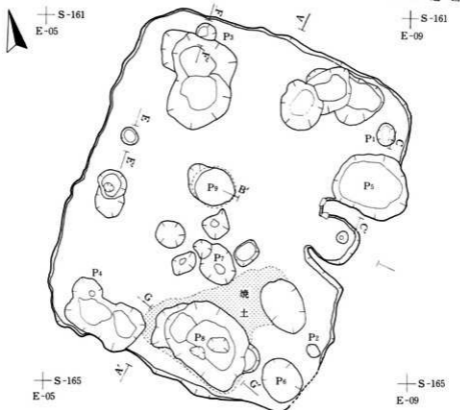
〔出土遺物〕（第15図）

埴 1は土師器で底部を欠損している。器形は丸味をもって外傾し、体中央部から直線状に外傾、口縁部でわずかの外反をみせる。内面は底部付近に放射状のヘラミガキ、体部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキ調整がみられ一般に丁寧である。調整後、黒色処理がなされている。外面の色調は褐色を呈し、胎土は均質で焼成もよく硬質である。

2は須恵器で1同様、底部を欠損している。器形はやゝ丸味をもって立ち上がり口縁部での外反はみられない。内外面とも調整はなく焼成は良好で硬く色調も灰黄褐色を呈している。

甕 3は土師器の甕で口縁部から肩部付近にかけての破片である。成形にロクロを用い、器形は長胴の甕で口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部で上下方向への挽き出しがみられる。また幅1 cm弱の縁帯がめぐる。焼成はやゝ硬く、胎土内に石英の砂粒を混入する。調整痕は外面だけで胴部辺に斜方向のヘラケズリがみられる。色調は黄橙色を呈している。

その他破片については第 表を参照されたい。ただ本住居跡は土師器の数が多く逆に赤焼き土器の数が少ないことである。



注記

B-B'

1. 焼土・埴輪色土層入。
 2. 黄橙 (7.5YR3/6) 焼土。
 3. 赤褐色 (5YR4/6) 焼土。
 4. 1.25倍赤褐色 (5YR4/4) 焼土。
 5. 黒りすず。
 6. 暗褐色 (10YR3/3) 焼土を若干含む。
 7. 暗褐色 (10YR3/3) 同上。
- D-D'
1. 暗褐色 (7.5YR5/6) 焼土塊・深層土を含む。
 2. 暗褐色 (7.5YR3/3) 腐植土。
- F-F'
1. 黒褐色 (10YR2/2)。
 2. 1層に地山の土層入。

C-C'

1. 暗褐色 (10YR3/3) プロップ層入。
2. 黒褐色 (10YR2/2)。
3. 暗褐色・焼土を多量に含む。

E-E'

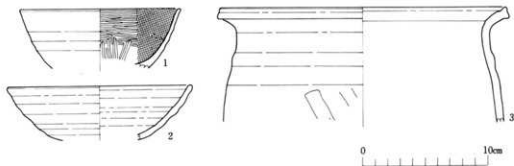
1. 暗褐色 (7.5YR3/3)。
2. 黒褐色 (7.5YR2/2)。
3. 黒褐色土にローム層入。

G-G'

1. 黒褐色 (7.5YR2/2) 焼土塊の粒子層入。
2. 1層に程度G-A層入。
3. 黒褐色 (7.5YR2/2)。
4. 腐色 (7.5YR4/6)。



第14図 YD56住居跡平面図



第15図 YD56住居跡出土土器実測図

T H 68住居跡 (第16図、写真7)

〔遺構確認面〕 表土A₂層(黒褐色10YR 5/2)の中央部で検出した遺構である。

〔保存状況〕 全般に遺存状態は良好である。

〔平面形、長軸方向〕 東西にやゝ長い隅丸長方形で、長軸方向はE-39°-Sである。

〔規模〕 長軸(東西)4.5m、短軸(南北)3.7mの規模をもつ住居跡である。

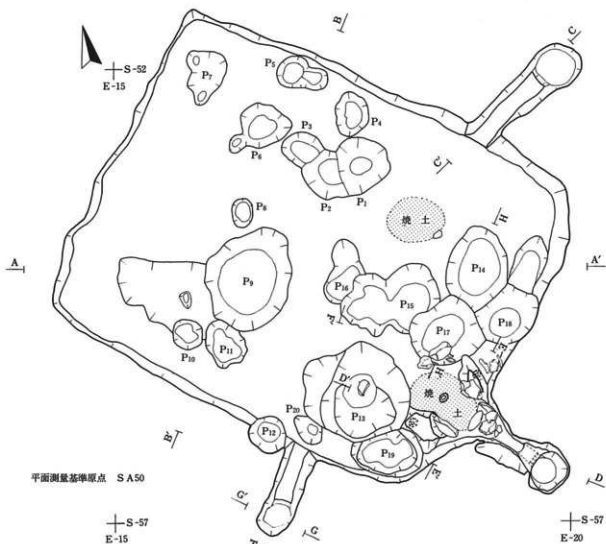
〔増改築〕 カマド、ピット等から想定し、少なくとも二度の改築が行われたものと思われる。また長軸と短軸の差が大きく且つピットの配置から推し東側への増築の可能性も考えられる。

〔堆積土〕 II層群が堆積土で基本的には3層に分層される。第1層(IIa)は黒褐色(10YR 5/2)で若干の粘性をもち極小炭化粒を包含する。第2層(IIb)は暗褐色(7.5YR 5/4)で褐色土粒を含む。第3層(IIc)は暗褐色(7.5YR 5/4)で上記に類似するが前者に比べ炭化粒子、褐色土粒の混入度が高い。堆積土内、及び床面上から多くの土師器、須恵器、赤焼き土器の破片が出土した。

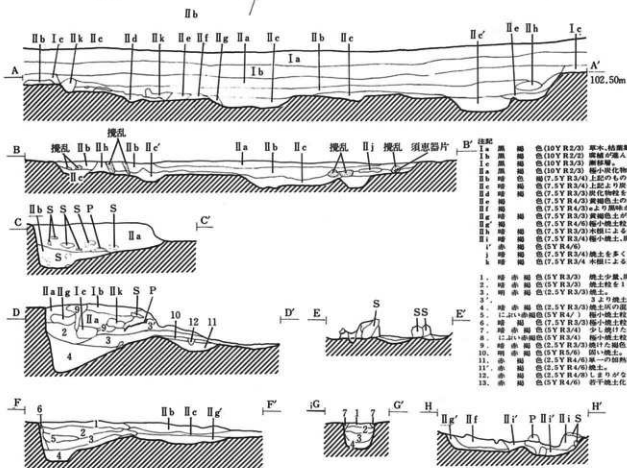
〔壁、床面〕 残存壁高は10~20cmほどで傾斜角は約50°を測る。床面はほぼ平坦で北カマド、東カマドの焚口部付近に焼土の広がりがみられた。また床面に礫が散在する。

〔柱穴〕 ピットは合計20個を数えるが柱穴と想定されるものはない。埋土の状態からみると、①単一黒褐色土のもの、②汚れた褐色土のもの、③褐色土のもの、④焼土が混入するもの4種類に分けられる。

〔カマド〕 カマドは3個所発見され、このうち保存状態の良いのが東壁のカマドである。北カマドは煙道及び煙出しだけを残し他は消滅している。煙道は1.5mを測り壁に対しN-20°-Eでやゝ東に斜傾する。煙出しは煙道から10cm弱の落ち込みをみせている。南壁カマドも残存状況は北カマドと同様である。煙道は1.0mを測り、壁に対し長軸方向はS-8°-Eで東にわず



平面測量基準点 S A50



1. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 2. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 3. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 4. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 5. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 6. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 7. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 8. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 9. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 10. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 11. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 12. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 13. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 14. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 15. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 16. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 17. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 18. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 19. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。
 20. 埋 糸 織 鉄 (IV R2/2) 腐牛・結露腐壊。

第16図 T H68住居跡断面図



かに傾く、北カマドは燃焼部を消滅しているのに対し、南カマドはレンズ状に落ち込む燃焼部を遺存している。煙出し部は前者同様の落ち込みをみせやゝ外方に開く、東カマドは壁に対しほぼ垂直に外方に伸び煙道は約1mを測る。袖石、支脚の痕跡、くり抜き煙道に埋め込まれた甕などが検出された。また支脚のビットと対になって両袖の中に小ビットが検出された。なお袖には補強材として石を用い芯としている。一方燃焼部と想定される位置に長径約80cmの楕円形状の焼土の広がりを検出した。

〔貯蔵穴〕 東カマドに付帯する貯蔵穴はP₁₇と想定される。埋土上層において土師器の坏が出土しているが他のカマドについては不明である。

〔出土遺物〕 (第17・18図)

遺物は土器類と石器類である。土器は土師器、須恵器、赤焼き土器の3種類であり器種は坏と甕類だけである。出土土器の傾向として土師器の甕類が多く坏類が全般に少ない。以下完形復元土器について概略を記す。

坏 1 は土師器の内黒坏である。底部は回転系切りで無調整、器形は底部から丸味をもって立ち上がり口縁部付近でやゝ内彎し口縁部の外反はみられない。調整は内面のみで底部から中央辺まで放射状のヘラミガキを行い口縁部付近は横方向のミガキ調整に変わる。焼成は良好で硬く、色調は黄白色を呈している。2～4は赤焼き土器である。いずれもロクロ成形で内外面の調整は一切認められない、また黒色処理もなされない。器形は三者三様であり4は器厚が厚く口縁部に内彎傾向がみられる。5、6は須恵器で底部の一部もしくは大半を欠損している。口縁部の器形に若干の差異があるものの胎土、焼成等は類似しており色調は灰白色を呈しやゝ軟質の感を受ける。6は口縁直下から体部上半にかけて判読不明の墨書が認められる。

甕 7～13、15 は土師器の甕で10、15を除き全てロクロ未使用土器である。8は器形の全容を知れる小形甕で巻き上げ技法によったものである。口縁部は短かく「く」の字状に外反し、外面の調整はタテ方向のヘラケズリがみられる。口縁部は内外面ともナデによっている。色調は黄白色を呈し胎土中への細砂の混入が顕著である。また底部に木葉の圧痕が明瞭に残されている。9は底部の器形に特色のある破片で比較的厚手の作りとなっている。11は口縁部が強く屈曲して外傾する特異な形状を呈し成形は巻き上げ法によっている。13は中形の甕の破片で内面はハケ目の調整が緻密に行われている。15は底部を欠損する大形の長胴甕で、煙道部の支柱として利用されていた。成形にロクロを用い、胴部外面はタタキ目とヘラケズリで調整し、内面はヘラナデによっている。色調は赤褐色を帯び加熱を受けた様子がうかがえる。口縁部は上下に挽き出され緑帯がめぐる。10は小形の甕で胴部から上方を欠損しているがロクロ成形によったものである。特に底部は回転系切りで調整はない。胎土、焼成とも良好で硬い。14は須恵器の壺の胴部である。底部と口縁部を欠損し器形の全容は不明である。胎土、焼成とも良好で色調は青灰色を呈し極め